

庚申塚古墳発掘調査報告書

— 村道改修工事に伴う前方後円墳の北裾部発掘調査 —



1994

長野県上水内郡牟礼村教育委員会

庚申塚古墳発掘調査報告書

— 村道改修工事に伴う前方後円墳の北裾部発掘調査 —



1994

長野県上水内郡牟礼村教育委員会

序

庚申塚古墳は、昭和55年6月17日牛札村の史跡に指定された前方後円墳である。古くから塚の上に庚申塔が祭られていたので、通称「庚申塚」と呼ばれていた。全長約52m、後円部の直径約31mの竪穴式石室であると推定されている。未発掘なので後円部の内部構造は不明である。

平成5年8月、小柳義男先生を団長としてお願ひし、文化財調査委員会の矢野恒雄先生を中心にして各委員の皆さん方の積極的なご協力を得て発掘が進められた。

発掘調査の目的は道路改良事業に伴い、古墳の埋蔵文化財損壊を防止するために古墳北側の道路部分の緊急発掘を行ったものである。従って、内部の状態については不明であるが、多数の葺石^{ふきいし}と同時に円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片^{はり}が出土した。粘土を薄くしたり、つなぎ目を接続する時にたたいて出来たと思われる小さなひし形の格子目があり、須恵器の製造技術が使われていた。破片を基に古墳の作られた年代は5世紀前半頃のものと推定される。古墳の詳細は今後の調査によるが、長野県埋蔵文化財センターによると有力豪族の前方後円墳だったのでは、とみている。位置的に見ても、支配下と思われる善光寺平を一望出来る場所である。

作業協力者・調査員の皆様には、短期間ではありますが、8月の真夏に大変ご苦労をおかけしました。ご協力に対しまして厚く御礼を申し上げます。

今回の発掘にあたって、長野県埋蔵文化財センター調査部長小林秀夫先生、長野県文化課指導主事白瀬新治先生、埼玉県本庄市教育委員会太田博之先生をはじめ、多くの方々にご指導ご協力頂きました。ここに感謝を申し上げ、今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。

牛札村教育委員会教育長 山田 邦彦

例　　言

- 1 本書は、県道長野荒瀬原線のバイパス工事による村道のつけ替えに伴って実施された「庚申塚古墳」北側部分の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、牛札村教育委員会が実施したものである。発掘調査は平成5年度に実施し、整理作業は平成6年度まで行った。
- 3 発掘調査の記録、および出土遺物は、牛札村教育委員会が保管している。その際に用いる遺跡の略号は「MHK」である。
- 4 本書の作成にかかるる図面・遺物の整理等は主として小柳義男が実施したが、墳丘実測図および遺構図の作成は鈴ジャステックによるものである。
- 5 本書における実測図の縮尺は、各実測図に示してある。
- 6 本書の執筆は主として小柳が行ったが、第2章第1節は矢野恒雄が執筆した。編集は小柳が行った。
- 7 本調査にあたり、小林秀夫・百瀬新治の両氏にご教示、ご指導をいただいた。また、本書の作成にあたって、市川隆之・太田博之・小林秀夫・小林義治・白沢勝彦・鈴木徳雄・高野永篤・土屋 積・原 明芳・町田清司・矢島宏雄・矢島洋子・山口 明の各氏および埼玉県児玉町教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、長野市立博物館の皆さんにご教示、ご協力をいただいた。

厚く感謝いたします。

本文目次

序

例　言

第1章　発掘調査の経過	1
第1節　調査に至る経過	1
第2節　調査の体制	1
第2章　遺跡の概観	3
第1節　平出地区の地理的・歴史的環境　—南部を中心に—	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	5
(1) 沿革	5
(2) 交通	5
(3) 産業	6
(4) 庚申塚古墳上の石造物	8
第2節　庚申塚古墳と周辺の古墳	10
1 庚申塚古墳をめぐって	10
2 庚申塚古墳周辺の古墳分布	11
(1) 鐵治久保古墳	11
(2) 小丸山古墳	15
(3) 泥ノ木古墳	15
(4) 庚申塚古墳周辺の古墳	15
第3章　庚申塚古墳の調査	18
第1節　調査の概要	18
1 調査の概要	18
2 遺構と墳丘の図化	18
第2節　調査の結果	20
1 層序と地形	20
2 古墳時代の遺構と遺物	22
(1) 古墳北側部の状況	22
(2) 古墳西側の堀	22
(3) 古墳北側部出土の遺物	26
3 平安時代の遺物	31

4 江戸時代の遺物	32
5 その他の遺物	34
6 成果と課題	34
(1) 庚申塚古墳の規模	34
(2) 格子目叩きをもつ埴輪	35

挿図目次

第1図 平出地区を中心とした全図	3
第2図 平山南部を中心とした分布図	5
第3図 平出地区の古墳分布図	11
第4図 鐵治久保古墳出土遺物実測図	13
第5図 庚申塚古墳北東部トレンチ断面	20
第6図 庚申塚古墳墳丘実測図	21
第7図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図1	23
第8図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図2	24
第9図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列断面	25
第10図 庚申塚古墳西側のり面 南北方向断面	27
第11図 庚申塚古墳西側のり面 東西方向断面	27
第12図 庚申塚古墳北裾部出土埴輪拓影	28
第13図 庚申塚古墳北裾部出土埴輪拓影	29
第14図 庚申塚古墳北裾部出土遺物拓影	31
第15図 庚申塚古墳北裾部出土遺物実測図	32
第16図 庚申塚古墳北裾部出土鉄釘	33
第17図 庚申塚古墳北裾部出土古銭拓影	33

別添図

- 第1図 庚申塚古墳実測図（1：200）
 第2図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図1（1：60）
 第3図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図2（1：60）

写真図版目次

- 図版1 庚申塚古墳周辺航空写真（平山地区）
- 図版2 庚申塚古墳遠景
- 図版3 庚申塚古墳遠景
- 図版4 庚申塚古墳調査風景
- 図版5 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列
- 図版6 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列
- 図版7 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列
- 図版8 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列
- 図版9 庚申塚古墳北裾部の石列
- 図版10 庚申塚古墳北裾部遺物出土状況
- 図版11 庚申塚古墳西後方掘削面
- 図版12 庚申塚古墳出土埴輪
- 図版13 格子目叩きの埴輪
- 図版14 格子目叩きの埴輪
- 図版15 格子目叩きの埴輪
- 図版16 凸帯の剥離した埴輪
- 図版17 朝顔形埴輪と凸帯
- 図版18 庚申塚古墳出土遺物（陶磁器）
- 図版19 銀治久保古墳山上遺物
- 図版20 銀治久保古墳出土遺物

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

主要地方道長野荒瀬原線のバイパス工事事業が平成6年度完成を目指し昭和60年度から開始されている。

この事業に伴い、すでに北から三本松遺跡・上の山遺跡・東浦遺跡・西浦遺跡の4カ所の調査を終えており、平出遺跡群の南端に位置する庚申塚古墳もこの路線計画に当たる調査が必要とするところとなった。

平成5年6月、現地にて事業主体者である長野建設事務所と長野県教育委員会文化課と協議の結果、古墳墳丘を現状のまま保存すべく、道路設計計画を見直すことに決まった。

これにより古墳の裾の調査を実施することになった。

7月24日 試掘調査

8月1日～9日 本調査に入る。

第2節 調査の体制

調査委託者 長野建設事務所

調査受託者 牟礼村教育委員会

調査会

顧問 平井博文 牟礼村長

会長 小林桂太 教育委員長

理事 横山 淳 教育委員

森 孝雄 //

原田光子 //

調査団

团长 小柳義男 長野市芹田小学校教諭

調査員 欠野恒雄 文化財調査委員長

米沢稔秋 文化財調査副委員長

青山紫朗 文化財調査委員

原田 茂 //

丸山 久 文化財調査委員

丸山義一 //

調査協力者

紅粉 彰 長野建設事務所長

羽田袈裟雄 // 建設課長

小池 清 長野建設事務所係長

中村克則 // 技師

広田秀和 車両建設課長

近藤克彦 // 建設係長

大川説夫 // 計画管理係長

地元協力者

原田誠志

原田金吾

山崎 明 平山区長

白鳥岳史 // 副区長

高野直臣 // 南区組長

事務局

山田邦彦 車両教育委員会教育長

仲俣一重 // 次長

伊藤恵子 // 主査

近藤 祐 // 臨時職員

作業協力者

前田竹千代 柳沢勇吉男 木賀田直治

伊藤ますみ 小林和多利 松木敦子

第2章 遺跡の概観

第1節 平出地区の地理的・歴史的環境 一南部を中心に一

1 地理的環境

平出南部の集落は主として平出集落センターより南方の集落で、旧北国街道(現長野荒瀬原線)



第1図 平出地区を中心とした全図

に沿い街村をなしている。これらは大正12年5月5日、青野神社（南部）、大穴半遅神社（本村）、山神代神社の3社が合併して平出神社になる前の青野神社を氏神とする地域である。

平出北部は月見川を中心東北に傾斜した地城であるが、南部は西に豊野町の水源地である磐山（744.5m）の峰を背に、やや南東に傾斜した高原台地で名のつく自然流はない。いわゆる完全な畑作地帯のオカドコである。近年は果樹園芸が農業の中核となっている。

気候的には同じ牟礼村でも三本松の峠より北側に比べて暖かく、春は桜の開花が五日程早く、冬は降雪量が少ない地域である。

南端の庚申塚古墳近辺は急坂な平出坂の上りきった地点で、街道筋には通称「のぞき」と言われる場所もある。南方脚下には宇治治久保を見下し、その遠方彼方には善光寺平が一望のもとに展開している。明治11年明治天皇北陸御巡幸の折、銀治久保の小休所で「良き見晴しや」と仰せられ、以来この場所は通称、見晴し坂と言われるようになったとのこと。また昭和7年頃、帝展審査委員の岡田三郎画伯らが来訪し、桃の花盛りに絵をかき、この辺を名所丹霞郷と命名された。まさに景勝の地である。

最近は桃畠地が字東浦に形成され、桃の開花期には北信五岳を背景にした風景は絶好で、丹霞郷として、各地からの観光客で賑わっている。



写真1 桃の花咲く丹霞郷

2 歷史的環境

(1) 沿革

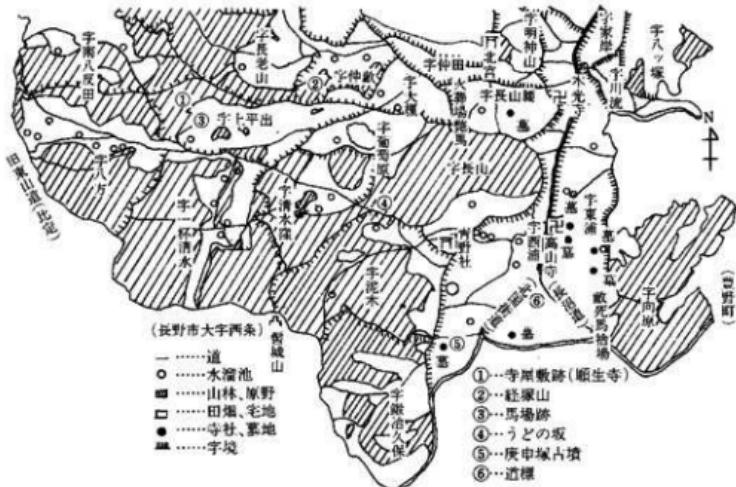
旧青野神社の祭神は大火牟遲神(大国主神)で、平出神社とともに豊野町の出雲神社とも同神である。これは善光寺平北縁の出雲文化系と同一区域内であることを示すと言っても過言ではない。

平出の文献上の初出は天正10年(1582)であるが、平出南部が平出新田村として独立したのは元禄3年(1690)で幕府の直轄地であった。その後享保9年(1724)に飯山領となり、明治2年7月飯山県、同年11月長野県に編入されたのである。明治8年には本郷(北部)並びに山神代村と共に3カ村が合併して平山村となり、明治22年の町村合併で牟礼村となり、翌年中郷村となつたのである。

(2) 交 通

旧北国街道と長沼道の分岐点に「是より右善光寺みち是より左長沼みち」と刻された石の道標(高さ80cm)がある(現在は原田清作家の入口にあるが、かつては道の角にあった)。現地において道筋のあり方を予想にみると、東方よりきた長沼道は街道を横断して西方にわたり、原田慧家のすぐ裏の小道につながって、更に西方にのび、うどの坂(第2図参照)に通じている。この道は最終的には飯綱山麓を経て戸隠に達する道筋で、北国街道以前の古道である。長沼道に関する古文書として、牟礼区蔵の次のような文書がある。

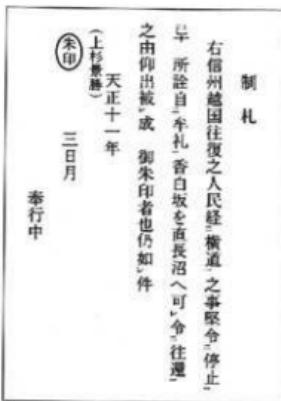
天正10年(1582) 6月13日、信長の臣森長可に代わって北信4郡を掌握した上杉景勝が、越後より長沼城への往還について「香白坂(神代坂)を通りなさい。横道を通ってはいけない」と禁



第2図 幸出南部を中心とした分布図（幸出役場蔵 明治18年一筆帳による）



写真2 平出南部の道標



じた文書である。この裏をかえせば牛札から長沼へ香白坂を通る以外に、平出の南部には善光寺平へ下る道があったことを示しているのである。このことについて慶長5年（1600）北信4郡を与えられて海津城（松代城）に入った森忠政は同7年上杉景勝と同じく「牛札より白坂を直に長沼へ…」と命じている。香白坂の香がとれて白坂になっているだけである。同8年には大久保長安の名において同内容の文書が出ている。慶長15年（1610）2月、松代城から越後福島城主に移った松平忠輝は、翌16年8月21日、牛札宿宛に「香白坂を直に長沼新町へ往還せしむべく候…」と命じ横道通行を禁じている（以上牛札区藏文書）。しかし同年9月3日には忠輝は北国街道諸宿に伝馬条目を出し、北国街道が正式に発足している。その時点から長沼道は逆に脇道に格下げとなり、従来の禁じられていた道が本街道になったのである。何れにしても平出の南部は牛札一長沼一松代への街道と、牛札一善光寺平への分岐点であり、また善光寺平から戸隠方面への古道との交差点でもあり、交通上峠越えの要地であったのである。

（3）産業

この地は農業を中心であるが、前述のように水利に乏しく畑作地帯である。このことを延宝7年（1679）の平出新田^{田方}検地帳により田畠の等級をまとめると表1のようである。

この表により若干考察してみよう。田方は畠方の面積の約13分の1で極めて水田の割合が少ない。しかも畠方が1筆当たり4.31畝に対し田方は1.95畝で、小さな田が多い。そして下、田が大部分である。一方畠の方も下、畠が中心であるが1筆の面積は4.3畝で田より広い。同帳の記録により石高をみると田方は23.542石、畠方は2120.646石で、田方の石数は畠方の約1割であるから、面積に対する比率よりは、田方の収入が多いということになる。上畠は屋敷地で計36筆中、同一

表1 延宝7年平出新田畠方等級別表

等 級		町	反	畝	歩	筆 数
田 方	下 田		4	1	26	14
	下 、 田	2	0	8	20	114
	合 計	2	5	0	16	128
畠 方	上 畠 (屋 敷)		9	6	1	36
	中 畠	1	8	9	20	36
	下 畠	6	0	4	10	99
	下 、 畠	23	8	6	27	590
	合 計	32	7	6	28	761

人が2筆持っているので、実際の軒数は35軒となり、1軒当たりの屋敷地は約2.74畝となる。

次に延宝7年の検地帳により、その耕地名を記してみよう。

田方は、西浦・池田・東浦・清水窪・上平出・一杯清水・八方・八反田・長山こし・針の木・室飯山端道・長山・鐵治久保・ふたう原・せと山のこし。

畠方は、東のそき道そへ・東浦・東浦大道そへ・北浦・外堀大道そへ・古山ほまち畠・西浦・田島・鐵治窪・庚申堂西三弥・とろノ木・志の者ち・長山・室飯道・室飯境塚・中くね・長良山・八反田峯・清水窪・長山腰・大窪・上平出山きし・八方・ふと原・上平出・一杯清水・神代さかい・明神山。

これらは現在、大部分が大字平出の小字名になっている。所有地の分布関係からすると、現在の北部地区にもあり、延宝年間から所有する耕地は新田村と本村とでは入り組んでいた景観がうかがえる。

明治7年の田畠等の面積は表2のようである。表1に比べると水田は3倍余にもなり、逆に畠地は減っている。また屋敷地も少なくなっている。水田は第2図に溜池の分布が示されているように、用水堰はなく溜池灌漑によるものである。このような天水田の解消と水田面積の拡大を期して引水計画が立案された。

明治10年原田良八（原田幸衛氏曾祖父）は平出地区の代表者に推されて、主として平出南部地区に野尻湖水を引水して開田開発に踏みきった。明治11年2月平出村総代原田藤作・原田弥吉らは仲林素友（飯山町士族）宛に「誓約書」を送り、1反歩水代10円の契約で引水方を正式に依頼した。水路の通過村は野尻湖一水穴一源訪原一吹野一戸草一小玉一芹沢一北川一野村上

表2 明治7年旧平出新田村税地

出	7 ^石	6 ^石	畝	14 ^石
畠	27	2		14
屋 敷			7	4
山 林	28	1		28
合 計	63	6	6	14

（『長野県町村誌』より）

一黒川一平出で、等高線上に飯綱山麓を迂回する雄大な計画であった。かくて明治13年8月水路工事が開始され、長山地緒から巌山の麓まで労力延べ約1万人以上が投入されて、同年12月用水路と隧道が完成したようである。しかし残念ながら中江用水（新潟県新井市）との野尻湖水利権論争の敗訴と愛民会社の資金難のため、業半ばにして工事は挫折し通水じまいに終わった。現在同地区の、およそ山林・原野と耕地の間（第2図参考）に堰跡が残っている（『信濃』403号「明治期野尻湖引水事業についての考察」拙稿）。地区民はこれを良八堰と称し過去を偲んでいる。

(4) 庚申塚古墳上の石造物

前述のように延宝7年の検地帳には庚申堂西三弔の畠地名があるので、当時既に古墳上には庚申さんのお堂が祭られていたことは間違いない。そして同帳の末尾に庚申領として3斗の除地がある。村中に庚申堂にこもり、行事が行われたのである。古墳正面つきあたりの後円部に高さ107cm入母屋型の庚申石祠があり、年号はないが2鶴2猿が正面に刻され、祠内に1光3尊仏が安置されている。これとちょうど同形のものが東黒川の公民館にもあり、延宝□年の文字が見えるので、前記延宝7年の検地帳の頃のものであろうか。その他この庚申塔を中心に多数の墓塔等が立ち並んでいる。その主なものを表3にまとめると次頁のようである。これらの石造物について若干述べることにする。

自然石文字碑の「幸太神」と表面に刻されているものは、実際には庚申塔であるか、幸神（道祖神）であるかは定かではない。問題はその裏面に「平井手牧□天九月」と刻された平井手牧である。建立年月は不明であるが、この碑は同地区の平井敏和家の祖先が建立したとの家伝がある。



写真3 後円部の庚申塔（中央）

表3 庚申塚古墳上の主な石造物

名 称	高さ(cm)	形 態	年 代	碑 文 そ の 他
庚申塔	107	入母屋型祠	不 明	「二輪二猿、祠内に一光三尊佛あり」
庚申塔	130	自然石文字碑	不 明	幸太神(表) 平井手牧口天九月(裏)
墓 塔	138	宝 輪 印 塔	寛文12	寛文十二壬子二月日辰口啓口口口七臺位
墓 塔	141	宝 輪 印 塔	貞享元	貞享元口口口 口啓口口七臺位
灯 篓	140	灯 篓 型	元禄7	元禄甲戌九月十日 新平井出村 施主九人
墓 塔	47	無 鍵 塔	元禄10	元禄丁丑天八月十日
地藏尊	69	丸 刻 地 藏 尊	正徳3	正徳二癸一月口口
墓 塔	39	角 柱	享保4	享保丙亥年十二月十四日一釋妙貞
地藏尊	55	丸 刻 地 藏 尊	享保13	享保十三口一月廿八日
墓 塔	54	光 背 型	安永5	安永五年六月廿八日 一叟了無宿士
墓 塔	50	自 然 石	安政7	安政庚申三月廿五日 上州世田郡口口村 般闇三慶信
その他		不明のものあり。		

手牧とは何をさすのであろうか。あるいは平井手(出)牧と読ませるのか。とすると、この近くにある旧青野神社の青は馬に通じ、平出の牧場を意味するものか。または牧は同族団体を意味するマキなのであろうか。とにかく今後の研究問題である。このほか「平井テ牧」と刻された石祠が平出神社裏にもある。これも平井敏利家が造立したもので、最初は、うどの坂の入口にあった山神であるとのこと。

寛文12年(1672)と貞享元年(1684)の大きな宝篋印塔が2基並んでいることである。表面の文字は全部は不明であるが、番号の戒名がついているので両方とも浄土宗の人の墓塔である。ところが現在この地区には浄土宗の寺院もなければ浄土宗の家もない。しいて言えば前川竹千代家の墓地に骨号のつく光背型墓塔が1基(年代不明)あるだけである。いずれにしても有力な浄土宗系の一族がおったことは否定できない。

安政7年(1860)の自然石の墓塔が後円部の入口にあり「上州世田郡…」と刻されているのは、北国街道を通って旅に死した人の墓塔であると解することができる。

元禄7年(1694)の灯籠は「新平井出村 施主九人」とあり、入母屋型庚申祠の前に立っているので、これは庚申塔に付隨したものである。しかしそのほかの墓塔には禪宗系、浄土真宗系の戒名・法名のついたのが集まっている形態をみると、ある時代に無縁仏になったものが、ここに集められた感がする。それだけにここは昔からタブーの地として住民は考えていたのである。現在この土地は南部地区の共有地となっている。

(矢野恒雄)

第2節 庚申塚古墳と周辺の古墳

1 庚申塚古墳をめぐって

庚申塚古墳は大字平出字西浦1007-1および1008-1に所在し、平山南部地区の共有地となっている。墳丘上には多くの石造物があり、それが、庚申塚の名の由来ともなっている。

古墳は善光寺平北部の蟹山（744.4m）から伸びた丘陵上に位置する（図版1・2）。

墳頂部の標高は588.7mになる。ここからは、長野方面から千曲川をはさんで須坂・小布施方面まで広がる善光寺平の眺めが良い。

庚申塚が前方後円墳古墳であると考えられたのは以外と古く、菅見によるかぎりそのもっとも古い記録は栗巣英治氏の報告である[1]。

それによると、「…所謂庚申塚へと押上がった。…正に一つの瓢形古墳であるようだ。圓い方の上には、新しい庚申石塚もあれば、又寛文と貞享の捕ひの二基の寶鏡印塔も立って居た。古い五輪の笠も五六は數へ得る處からして、此處は近古の墓所に利用された古墳であることが分明。…」とある。

しかし、広く周知されたとは言い難い状況であったようで、再評価されるまではしばらく時間がかかる[2]。

後年、内山信政氏は牟礼村の公民館報の中で[3]、「平出の庚申塚は、そのころの豪族の古墳で、前方後円墳ではないかといはれる。昭和40年の5月に歴史学の權威者米山一政先生が実地調査されて、前方後円墳であろうと推測された。なお、平出南部の小丸山も古墳ではないかと思われている。」と記述されている[4]。

その後、長野県教育委員会で調査した緊急分布調査報告書には「庚申塚遺跡 所在地大字平出字西浦1007-1 状況 平山部落の南はずれの道端に一見墳丘状の庚申塚と呼ぶ地籍があつて台帳面は墓地となっている。小丘上には石造物が多い。細文時代の磨製石斧を発見している。」と記述され、古墳と認識されていなかったようすがうかがえる[5]。

昭和54年、松沢芳宏氏は県史編纂事業の一環として調査された庚申塚の実測図を『信濃』誌上に発表され[6]、庚申塚が前方後円墳であることがようやく広く周知された。

報告によると、主軸はおよそ北45度東をとり、全長約45m、後円部径約25m、同高さ3.5m以上、前方部の先端の幅約15~17m、前方部高さ1.5mとなる。

古墳の築造年代については、立地や「墳丘の後円径に対して前方部幅の比率が小さい点、古式古墳の墳形をとっている」ことを、また、被葬者の性格については「本古墳が「越」と「信濃」を結ぶ街道に沿って立地しながらも、なおかつ、生前の支配地を望むことのできる前期古墳の立地に則していることは重要である。本古墳は、かつての交通の要衝に君臨した支配者をほうふつとさせる」と指摘されている。

昭和55年6月には牟礼村の文化財に指定され今日に至っている[7]。

2 庚申塚古墳周辺の古墳分布（第3図）

現在、庚申塚古墳の周辺には鐵治久保古墳・小丸山古墳・泥ノ木古墳が確認されている[8]。

同時代の遺跡は村内では、鳥居川の段丘状に位置する橋詰遺跡が確認されているだけである[9]。以下、3基の古墳の概要を記す。

（1）鐵治久保古墳

①鐵治久保古墳の概要

鐵治久保古墳（第3図2付近 正確な位置は不明）は、昭和35年磐山麓の採石工事に伴って倒



第3図 平出地区的古墳分布図（1：10,000）

然発見されたもので、十分な調査は行われていない。

しかし知らせを受けて現地を調査された米山一政氏により次のような報告がされている^[10]。「(前略)この、磐山東南で採石を行ったが、その時、完全な石積みのしたから鉄鎌等を町成多く出土した。採石のため石室は完全に崩壊していたが、業者の談を総合するに剖石の小口積み堅穴式石室で長さ1.8m前後、幅5.6mほどのものであったと考えられる。」

この式削石小口積みのものは、埴科郡内特に大室古墳群中高所にあるものや、更埴市倉料杉山の谷の奥深いところに見るが、上水内郡内では例の少ないものである。

この古墳は採石の際、遺物の出土によってはじめて古墳であることを知った程で、従って遺物の采集は完全ではなかったが、鉄鎌と不明骨器が発見された。鉄鎌は後藤守一氏の分類によると両丸造棘籠被蓋箭式に属するものでこの地方古墳出土通有の形式である。」

その後の報告で、人骨が出土していたこと、出土遺物の内容もより豊富であることが明らかになっている^[11]。

この古墳は完全に破壊されてしまい、かつてあった位置すら判然としない状況であるが、幸いに出土遺物が牛札村教育委員会に保管されているので紹介したい。

②出土遺物（第4図）

現在、牛札村教育委員会に保管されている遺物は次のとおりである。

大刀1点、剣1点、鉾1点、刀子1点、鉄斧1点、鑄造斧状鉄器2点、鉄鎌12点、砥石1点。大刀（第4図20）は全長109.5cm、刀身の最大幅3.6cm、背の厚さが0.6cm、重量が1.3kgある大型の大刀である。

刀身の切先はややふくらみをもち、鎬（しのぎ）をもたない平造りである。断面は二等辺三角形になる。茎（なかご）には1カ所廿釘孔と思われるものがあるが、鎬ではっきりしない。

関（まち）は斜めにいくぶん湾曲しながら茎に続く。

剣（第4図6）は現存長23.7cm、身の最大幅は3cmである。（重量82g）。

鎬をもち、断面は菱形になる。身の下部を欠いており、茎や関のようすは不明である。

鉾（第4図5）は先端を欠くが、現存の全体の長さが20.5cmあり、身の長さは16cmである。身の最大幅は2.3cmある。身の厚さは6mmほどで重量は138gある。

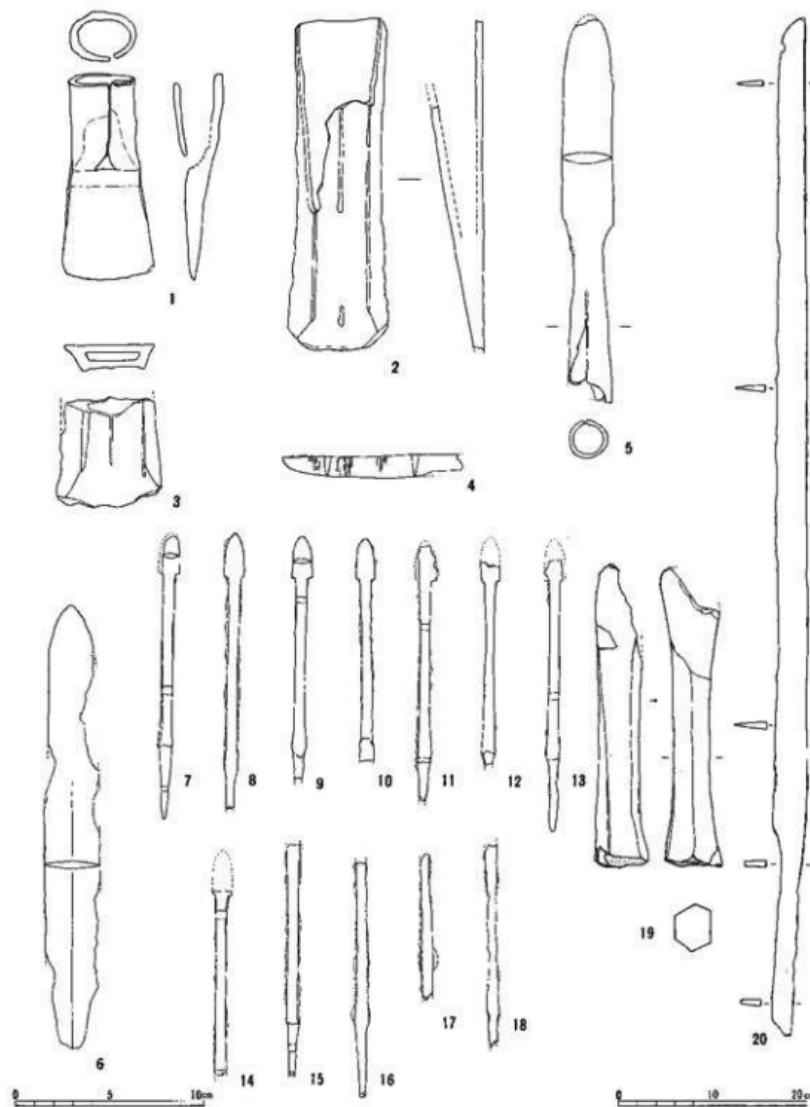
鎬は不明瞭で断面がレンズ状をなす。袋部は、ほぼ円形で径は2cmほどになっている。袋部の合わせ目をもつが、開きが少なくていいねいに作られている。

柄の状況は不明であるが、袋部内に木質部がわずか残っている。

刀子（第4図4）は刀身の下部を欠いている。現存長が9.5cm、刀身の最大幅は1.2cmある。背の厚さが4.5mm、重量は15gである。

刀身の切先はややふくらみをもち、鎬を持たない平造りである。断面は二等辺三角形になる。刀身の鎬面には木質部なのか、線状の付着物が観察できる。

鉄斧（第4図1）は、柄をさしこむための袋部を持つ有袋鉄斧である。袋部の鎬接面には、わ



第4図 銀治久保古墳出土遺物実測図 (1~18 1:2、19・20 1:4)

すか開きが見られるが、ていねいに作られている。断面は橢円形になる。いわゆる肩部の張り出しあはれらず、刃部は徐々に幅が広くなる。刃部は両刃である。全長11.1cm・刃部最大幅4.8cmで、重量が220gある。この種の斧は、櫛斧として使用されたようである^[12]。

鋳造斧状鉄器は2点ある（第4図2・3）。

2はほぼ完形である。全長は18cmほど（現存長17.6cm）で袋部幅4.8cm（袋部現存高3.0cm）、刃部最大幅5.3cmとなる。重量は360gある。

平面は長方形で、側面が三角形をなし（刃端と袋部端を結ぶ2線の角度は10ないし11度と鋭利である）、袋部横断面が台形をなす。刃部は氈状になる。袋部の深さは刃部先端4cm近くまである。また、身の上面に3条の突線が鋲出されている。

3も同種の刃部先端である。現存長は5.8cm、刃部最大幅は5.6cmとなる（重量は110g）。

袋部横断面が台形をなし、袋部の深さは刃部先端4cm近くまである。袋部の中には、木質部のようなものがわずか残っているがはっきりしない。

身の上面に3条の突線が鋲出されている。

この種の鉄器は「朝鮮からの舶載品」と考えられ、出土時期は「朝鮮においては5～6世紀」「日本でも5～6世紀にわたる遺物といえる」との指摘がある^[13]。本来的機能は土掘具^[14]であったものようである。

また、2点1組で発見される事例は、朝鮮半島東南部での組み合せと共通するものがあるようで、国内でも広島市地蔵堂山1号墳、三重県上野市わき塚第1号墳、鳥取市里仁第33号墳、磐田市寺谷第67号墳、鹿児島県曾於郡双子古墳で確認されている^[15]。

鉄鎌は12点ある（第4図7～18）。

12点とも、鎌身から茎のあいだに長い頭部をもつ反頭鎌である。完全な形のものはないが、7～10などからほぼ全体の形をつかめる。

全長は15cm近いものが多いように思われるが、いくぶん長く16cmほどになるものもあるようである（8）。

鎌身は2.5cm、頭部が9.5～10.5cm、茎が4cmほどになる。鎌身はレンズ状のふくらみをもつが、3～4mmと薄手のものである。鎌身の端は頭部とほぼ直角に交わる。

頭部の断面は四角形。茎との境付近で、いくらかふくらむ傾向がある。

茎の断面もほぼ四角形であるが、末端近くは丸みをおびてくる。一部、木質部様の付着したものも見られる。

重量（12点で153g）は、7は16gであるが、8は19gあり、完形ならば20gをうわまわるものと思われる。

砥石（第4図19）は柱状で長さが33.5cm、重量が1,140gほどの大型の砥石である。

一部欠損しているが、削端に自然面が観察できるので、長さは現状とそう変わらないものと思われる。

6面に使用の後を残している。砥面の最大幅は現在確認できる範囲で、5.3、4.8、4.2、3.0、3.0、2.5cmとなる。砥面は長いが、その幅はさほど広くない。

砥粒は中程度で、石材は凝灰岩のようである。置砥として用いられたものであろう。

③鐵治久保古墳の年代

先に述べたように、偶然発見された古墳であり、他にも出土遺物があった可能性も考えられるが、現存するものは武具と農工具を主体とする鉄器と砥石である。

出土遺物の組み合わせは、中野市方面（善光寺平北部）の林畔1号墳や山の神古墳の出土品と似た雰囲気がある^[16]。しかし、馬具の出土がないので、林畔1号墳より古相を残している。

また、鉄族が完全に長頭化していることや鍛造矛状鉄器の存在から、鐵治久保古墳を庚申塚古墳に統く5世紀後半の古墳であったと考えたい。

(2) 小丸山古墳

大字平出字西浦880・881・882に所在している（第3図4）。庚申塚古墳の北400mほどの位置にあたる。ここまで来ると善光寺平方面的眺望はきかなくなる。

磐山の東側山麓の水田地帯にあって、墳丘部は竹林・畑地と墓地になっている。墳丘の西から北側にかけて、壠がまわっているように見える。

かつて栗井氏は「附近の『小丸』と云ふ小高い處も、其名からして自明する如く、矢張り瓢形の古墳であったようだ。そして、その周圍に壠址の存する點から見て、恐らく、此附近の中心の塚であったかも知れぬ。」と記述されており、前方後円墳としての可能性を示唆されているが、戦時中に開墾されたり、南側は土取りによって形状が破壊されていたため、判断し難い^[17]。

(3) 泥ノ木古墳

これまでに報告されていなかった古墳で、磐山の山頂（744.4m）から東に伸びた尾根上（670mほど）に位置する（第3図3）。

東側には道が通っており、「誰信馬洗池」との伝承をもつ池も近くにある。

雜木林に囲まれているため、眺望はさほどでないが、庚申塚より80m以上も高所にあり、本来善光寺平一帯の眺めはすばらしかったものと思われる。

径15～16m程の円墳で、外見は積石塚のように見える。中央部がくぼみ、割石小口積みの石室の一部が露出している。

おそらく、鐵治久保古墳も本墳のような形状をしていたものであろう。

(4) 庚申塚古墳周辺の古墳

以上の3古墳のほか、[栗井1933]では、庚申塚からの眺めにふれて「成る程周囲には、圓墳が點々存在しているのも見えるのである。」と記述されているので、周辺にはさらに古墳の存在したことが考えられるが、現在確認できない。

ただ、いわゆる「小城」の山頂に積石塚を思わせる円墳（径25mほど）状の高まりが認められるが、山城の形成にあたって改変された可能性もあり、しばらく判断をひかえたい。

庚申塚古墳周辺に分布する古墳は、それぞれの規模も大きく、横穴式石室をもたないよううかがえる。

一方、磐山南麓には、若槻西条地区に13基の円墳が分布し^[18]、また、磐山の西方、三登山(923m)山麓には吉古墳群が分布している^[19]。

時代的には、それらに先行すると思われる、庚申塚古墳一帯に分布する古墳との関係も注目される。

註

- 栗岩英治 1933「磐山及附近の探査」『信濃』1次2巻10号 P16
- 信濃史料第1巻上には牟礼村地区の古墳として小丸山古墳が記載されているだけである。
- 内山信政 1966「石器・土器と古墳」『公民館報むれ』第57号 牟礼村公民館
- 当の米山氏は「上水内郡誌」で、「本郡内にも長野市上松原の池ノ平(地附山)、同市往生守花岡平、同市上高田、同市三才北田子、牟礼村平山西浦等に此の種の(前方後円墳をさす)古墳がある。」と記されているが、その平出の古墳については「確かなことは得然しない。」と詳細についてふれられていない。
- 米山 政 1976「古墳時代」『上水内郡誌歴史編』P118・P125 上水内郡誌編集会
- 長野県教育委員会 1971「農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」P16
- 松沢芳宏 1979「長野県上水内郡牟礼村庚申塚古墳について」『信濃』31巻4号
- 牟礼村文化財調査委員会 1993「のびゆくむれの里—牟礼村の昔と今—」牟礼村教育委員会
- 【栗岩1933】によると、庚申塚周辺の古墳について、「成る程周囲には、圓冢が點々存在しているのも見えるのである。(中略)附近の「小丸」と云ふ小高い處も、其名からして自明する如く、矢張り瓢形の古墳であったようだ。そして、その周囲に塚跡の存する點から見て、恐らく、此附近の中心の塚であったかも知れぬ。」と記述されている。
- また、「中郷村史」によると平出の北方、福井地籍で「マガタマ」が採集されているという。
- 清水勝治 「中郷村史」1960 P18 中郷村史編纂委員会
- 並沢 浩 1976「古墳時代—生活遺跡」『上水内郡誌歴史編』P173 上水内郡誌編集会
- 米山一政 1976「古墳時代」『上水内郡誌歴史編』P150 上水内郡誌編集会
- 長野県教育委員会 1971「農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」P15・16
「人骨は頭、四肢骨、歯は大きく丈夫なものであった。出土遺物については「直刀(93cm)1点、破片1点、劍(23.5cm)1点、刀子(9.4cm)1点、鐵劍12点鎗(21cm)1点、手斧(11cm)1点、破片1点、このほか骨製の印籠状のもので、彫刻したものもあったが、現在は所在不明である。」と記されている。
- 「骨製の印籠状のもので、彫刻したもの」というのは鹿角削刀剣装具の可能性もある。現物が不明なのは残念である。
- 古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究8 古墳II副葬品』 雄山閣
- 東 潮 1979「朝鮮二国時代の農耕」『椎原考古学研究所論集 第四』P527~533
- 村上恭通 1992「朝鮮半島の副葬鉄斧について」『信濃』44巻4号 P258 信濃史学会
- 村上恭通 1992「朝鮮半島の副葬鉄斧について」『信濃』44巻4号 P261 信濃史学会
脱稿後、野島 水 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻第4号により、铸造斧状鉄器(断面梯形铸造鉄斧ともよばれる)は国内で「26例以上」出土しており、「北部九州、瀬戸内、畿内地方に集中する。」ことを知った(長岡哲也・坂端1991「古墳出土の铸造鉄斧地名表」「寺口千歳古墳群」椎原考古学研究所による。報告書未見)。
- 東海・関東方面にも出土していないので、铸造斧状鉄器の流入経路として日本海側を考えるのがよいのかも知れない。
- 小野勝年・横山浩一 1982「長野県史考古資料編 全1巻(2)主要遺跡(北・東信濃)」P286~292

長野県史刊行会

- 17 [長野県教育委員会 1971]によれば、「一見円墳に見える。一説には以前から前方後円墳という人もいるが否定したい。長軸39m、高さ5mである。」
長野県史地名表には、小丸山古墳平出・西浦857山麗 (古) 円 (径17.0 高さ5.0 伝前方後円墳)と記されている。
長野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編 全1巻(1)遺跡地名表』P59
- 18 米山一政 1976『古墳時代』『上水内郡誌歴史編』P150 上水内郡誌編集会
- 19 米山氏は古古墳群について「その数、九十基、或は九五基ともいうが、中には墳丘体をなさない僅一、二mのものが三二程あり、その中にはヤックラ即ち砾石を積重ねたものがあって、真に古墳と認められるものは六三基である。」と記している。
米山一政 1976『古墳時代』『上水内郡誌歴史編』P140 上水内郡誌編集会
長野県史地名表には、古古墳群に98基の古墳が記載されている。

第3章 庚申塚古墳の調査

第1節 調査の概要

1 調査の概要

平成5年6月、県道長野荒瀬原線の改良工事が庚申塚古墳の西側に及んでいるので現場に立ち寄ってみた。工事は墳丘をさけているものの、掘削された西後方部に溝（堀）状の落ち込みが見つかった。

また、同工事に伴って庚申塚北側を通っている村道も改修されるもようで、一部墳丘部にかかる杭が打たれていたので、牛札村教育委員会、県教育委員会に連絡をとった。

協議後、同年7月24日より発掘調査が計画され、筆者が担当者として実施した。

調査は、村道改修部分約200m²を対象に実施した。西側県道通過部分周辺は橋脚を設置するため大きくカットされ、危険が伴うため遺憾ながら未調査部を残す。

調査により、道路敷下部より江戸時代の陶器を伴って多量の馬骨が出土した。さらに、その下部からは葺石を思わせる石列が検出され、その間から県内2例目となる、格子目印きをもつ埴輪が出土した。

調査は、葺石を思わせる石列の実測をして終了した。下部は将来の全体的調査のあろうことを考へ手を加えていない。

遺構部は砂で覆い、盛土して保存されている。

2 造構と墳丘の図化

古墳北側部の敷石部および墳丘の実測は、㈱ジャステック長野支店による空中写真撮影による写真測量で実施した。作業工程については同社の報告書より引用する。

牛札村庚申塚古墳遺跡測量作業報告書

計画機関：牛札村教育委員会

作業機関：㈱ジャステック長野支店

1. 作業概要

牛札村庚申塚古墳平面図及び、断面図作成について、測量方法として空中写真撮影による写真測量で行い、一部立ち木などによる隠蔽部分に関しては、実測・補備測量にて行った。

作成図面は、古墳側部の敷石部約120m²を1/20、古墳及びその周辺部約3,500m²を1/100、遺

跡断面図を1/10の縮尺にてそれぞれ作成した。1/20図面に関しては、敷石部の細部表現、10cmコンタ、単点、地形状等の図面作成とし、1/100図面は、全体の地形及び、敷石部の位置形状の把握を目的とした図面作成を行い、1/10図面は敷石部の断面形状の把握を目的とした図面作成を行った。

2. 作業工程

(1) 基準点測量

X・Y座標については、半礼村役場建設課より地籍図及び、基準点成果表を入手し使用した。 $\{(B'C'-5 \cdot 4) \cdot 5 : X = 80589.034 \quad Y = 22054.425 \quad 4 : X = 80556.339 \quad Y = 22069.749\}$ Z(標高)については、現場内にあるBM点を使用した。(BM=584.53m)

(2) 対空標識設置

空中写真測量に必要な面積中に数点(1モデル中に4~6点)設置した。今回は1/20に約35点、1/100に約20点の対空標識を設置し、それぞれの点に全てXY座標及び、標高を基準点より測量し測定地を与えた。

(3) 空中写真撮影

測量用カメラ搭載ラジコンヘリコプターにて下記条件により撮影を実施。

撮影日時：平成5年8月19日(天候：晴り)

使用カメラ：ハッセルブラット測量用カメラMK-70 f50mm

使用フィルム：プロニードカラー及び、白黒ネガ

撮影高度：1/20図面、地上約28m

1/100図面、地上約70m

全体景観写真、地上約100m

撮影時間：1h~2h程度

(4) 図化作業

撮影した白黒ネガによりポジフィルム(5cm×5cm)を作成し、図化用ポジフィルムとした。

図化作業においては、写真座標からモデル座標への変換を計算機を使ってリアルタイムに行う解析図化機^{*}を使用し、オペレーターが地形、コンタ、敷石形状、単点等を描画台上300#マイラーに忠実に表現した。

(注) * 1 解析図化機：ステレオコンパレーター/WILD LEITZ KERN DSR 14

描写台/WILD LEITZ KERN GPI

計算機/TOSHIBA J-3300/50

(5) 正描

図化素図上に300#フィルムをオーバーレーさせ、現場写真等を参照の上作成。

(6) 補偏測量

正描図陽画焼にて、現場で単点及び敷石形状等を計測し、修正を行った。

また、樹木等により写真測量が不可能な箇所に関しては、(1)の基準点を使用し、実測にて計測点及び修正を行った。

(7) 製図

上記の作業を経て校正後、300thマイラー上に製図を行った。

(8) 断面図

測量方法は、主にレベル測量を実施し、断面に当たる敷石は側面より描写した。長さは、現場形状により4～5mとし、2点の座標を直線で結び、測量を行った。

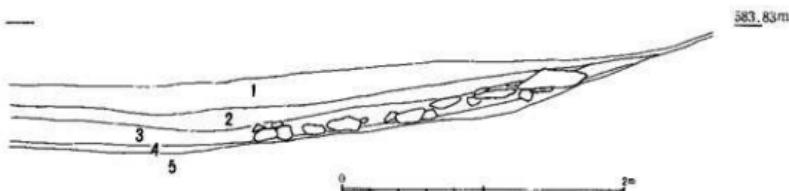
第2節 調査の結果

1 層序と地形（第1図・6図、図版1～3）

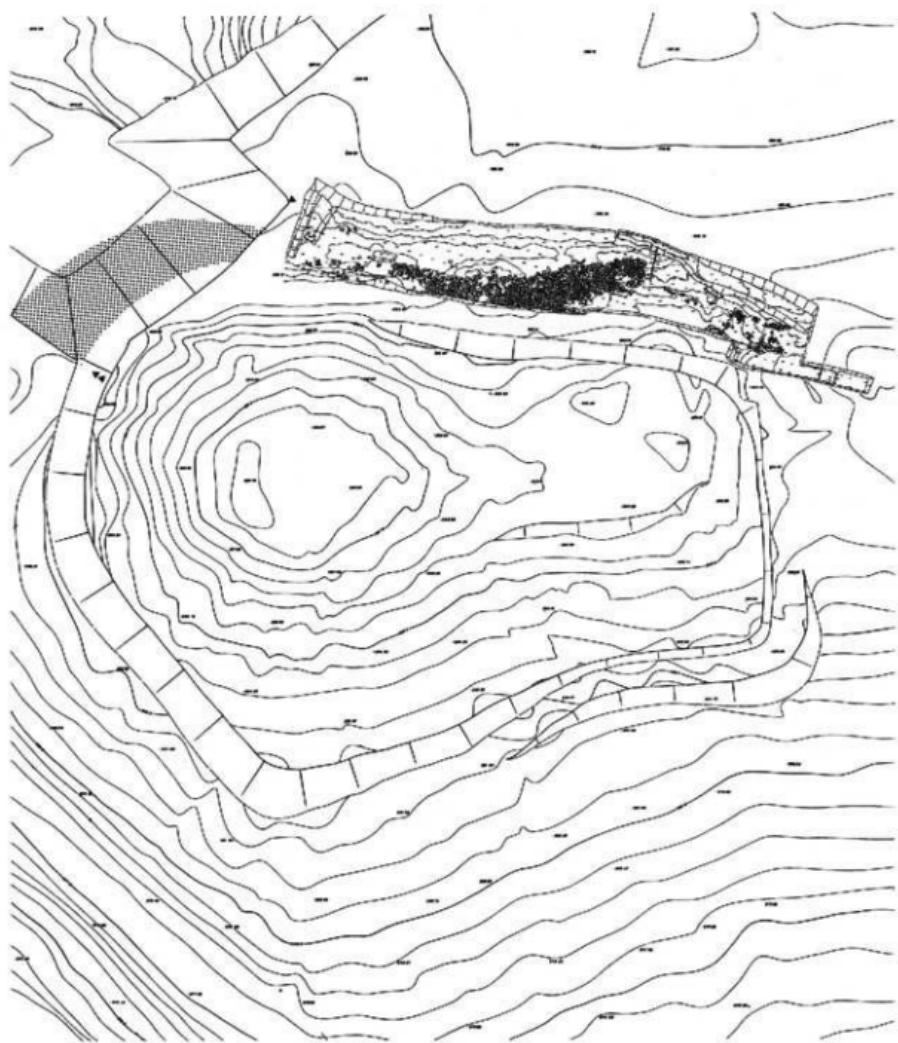
庚申塚古墳は善光寺平北部の磐山（744.4m）から東に伸びた丘陵上に位置する。墳丘部の最高地点は588.7mで、善光寺平からの比高はおよそ250mにおよぶ。

墳丘北東側部分の層序は表土（1層）、炭化層（2層）、茶褐色土（3層）、褐色土（4層）、黃橙色粘質土（5層）となっている（第5図）。

調査部分の多くは、道路敷の下部にあたるため削平されたり搅乱された部分もあるが、道路敷の直下には馬骨を含む炭化層が広がっていた。その下部にはわずかな茶褐色土層をはさんで、葺石を思わせる石列が検出されている。



第5図 庚申塚古墳北東部トレンチ断面（1：40）



第6図 庚申塚古墳墳丘実測図 (1:400)

2 古墳時代の造構と遺物

(1) 古墳北裾部の状況（第7図～9図、図版5～9）

墳丘北側には幅4mほどの村道が通っている。かつて磐山から切り出した石の運搬道として利用されたために、墳丘の裾部分は若干削られた状況であった。

道路敷き部分を重機で剥ぐと、石がずいぶんと並んだ状態が検出できた。しかし、切り出した石の運搬道として利用した際、ぬかるるので石をたくさん敷いたとの証拠もあり、遺構であるのか疑問もあった。

断面を観察するため先行してトレンチをいたところ、石が傾斜に沿って並ぶ状況を確認できた。そこで、葺石と類似した遺構と判断し、道路敷き部分全体を調査するに至った。

葺石状の石列は、墳丘のくびれ部付近から前方部にかけて、弧をかくように並ぶ様子が確認できた（第7・8図）。

とくに、くびれ部の裾のあたりから、前方部にかけての長さ15m、幅2mほどの範囲は石が密である。

葺石状の石が密集している部分の西側の裾部に近いところは、道路敷き部分の下がすぐ黄橙粘質土層となっていた。道路を作る際、削平された可能性もある。

また、東側の部分は、当初予をついた部分であり、道路敷き下に並ぶ石に対して遺構との認識が明確でなかったので、いくぶん掘り出してしまった可能性がある。

葺石状の石列が密集した部分の石の重なりは、裾部に近い南側ほど多いが、北側は少ない。

石列部分の傾斜は緩く（第9図）、墳丘部分を覆っている葺石とは性格を異にするものと思われる。

調査した範囲では十分確認できなかったが、墳丘部の裾部には大きな石が並ぶような様子が観察できた（図版9）。この線が墳丘の裾になるのかも知れない。

石は、比較的扁平で、拳大から頭大くらいのものまでが混じっている。この石は磐山など地元で産出する石と類似している。

D-D'の断面を取った部分の西へ1mほどの地点の周辺の石の間から、格子目叩きをもつ埴輪も検出されている。しかし、埴輪を据えた状況は確認できなかった。

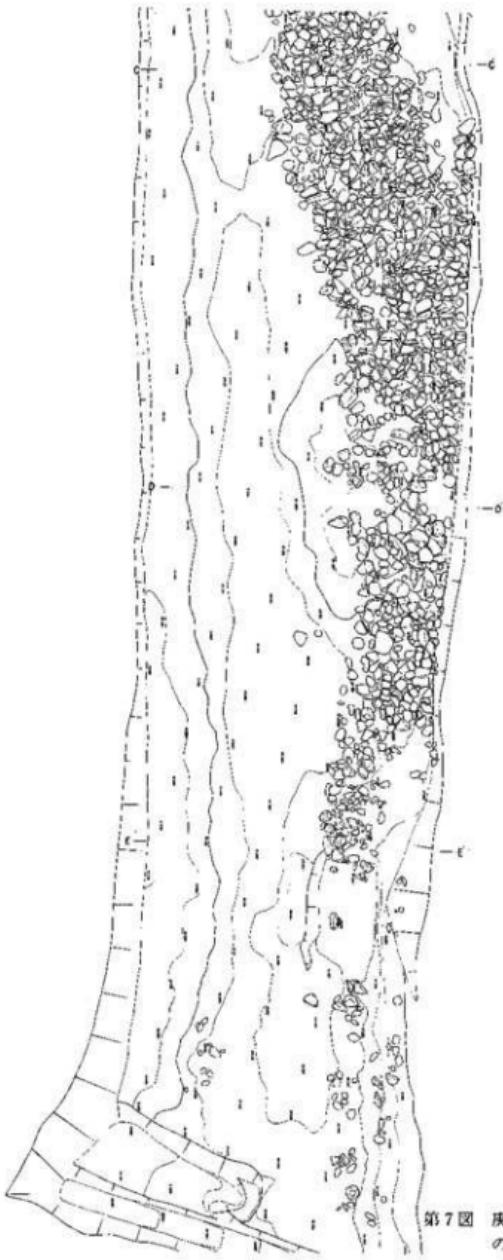
(2) 古墳西側の堀（第10図・第11図、図版11）

県道の建設に伴ってカットされた、のり面の2カ所に剝離状の落ち込みが検出された。

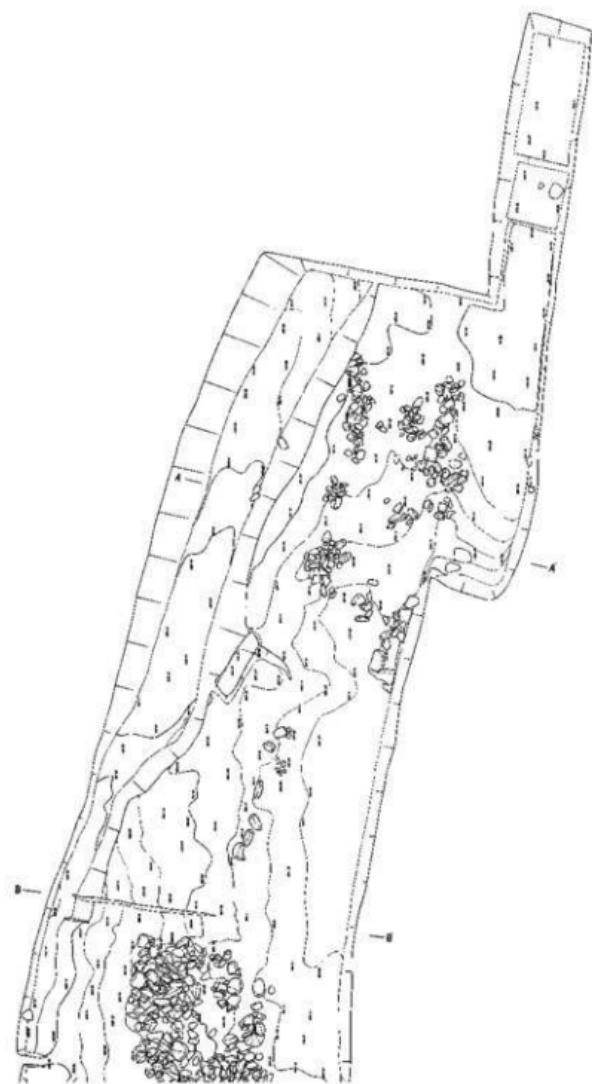
第10図は墳丘西側の南北方向の、のり面で観察した断面である。この部分は道路敷きから墳丘西端にかけて緩く傾斜するところである。

層序は道路敷きによって旧地形を保っていない部分もみられるが、表土・耕土（1層）、茶褐色土（2層）、茶褐色土混じり黄橙色土（3層）、黄橙色粘質土（4層）、礫混じり赤褐色粘質土（5層）となっている。

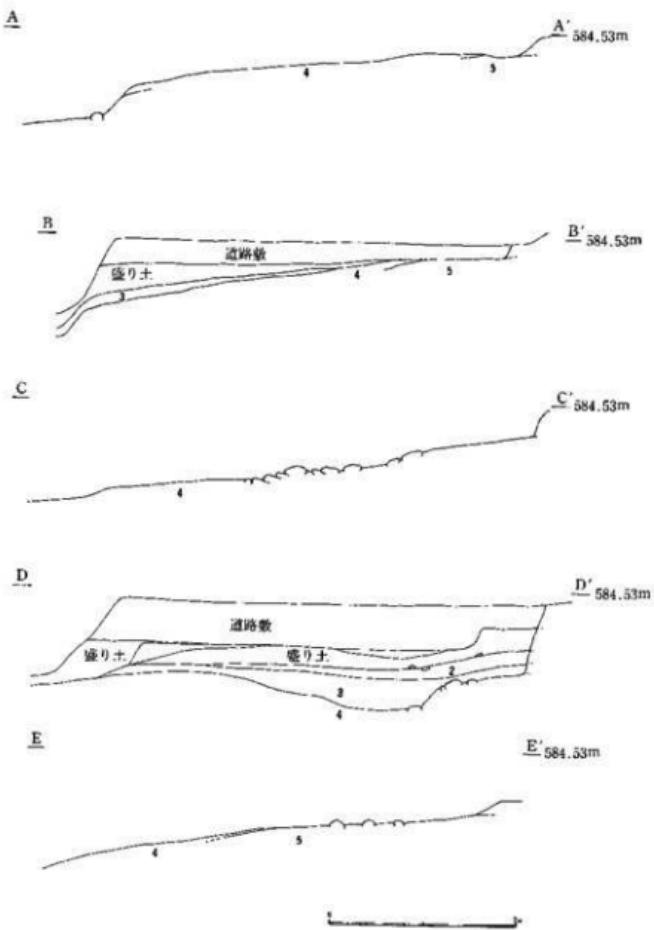
3層は、北端から2.5～5.5mの間に、4層を掘り込んで深さ50cmほど堆積しているが、おそらくは、墳丘部後方を断ち切った堀のようなものが存在したものと考えられる。



第7図 広中塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図1 (1:100)



第8図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図2 (1:100)



第9図 庚申塚古墳北斜部の葺石状の石列断面 (1:40)

第11図は墳丘西側の東西方向の、のり面で観察した断面である。この部分は墳丘からの傾斜が緩み、西方の耕地に続くところである。

層序は表土・耕土（1層）、黒褐色土（2層）、黄褐色土（3層）、疊混じり赤褐色土（4層）、疊混じり赤褐色粘質土（5層）、疊混じり黄白色粘質土（6層）となっている。

ここでは、幅5m以上、深さ50cmほどにわたって、6層が掘り込まれていた。先にふれた幅3m、深さ50cmほどの塊状のものとつながるものであろう。

2カ所の所見を総合すると、墳丘の西後方部には塊のようなものが存在していたことは確実である。ただ、北側部分で焼きの落ち込みを検出していないので、墳丘全体をめぐるようなものではなかったものと考えられる。

（3）古墳北裾部出土の遺物（第12図・13図、図版12～16）

出土遺物は、埴輪、須恵器甕である。

埴輪は49点出土している。すべて円筒埴輪である。いずれも小さな破片で全体の形を知ることはできない。

円筒埴輪の多くに格子目叩きが施されている点が注目される。

ア 朝顔形埴輪

1は朝顔形になるものと思われる。外面はタテハケの後、ナデが加えられている。内面はナデによって整形される。

口唇部周辺はナデで整形した後、口唇をハケで平らにしている。このためもあって、口唇は広くなっている。このハケは、破片の範囲で見るかぎり、一気に施されている。

直径はおよそ32cmほどになるものと思われる。胎土には小石粒を含む。器厚は11～13mmある。

円筒埴輪と比べて器壁が厚く、焼成も良い。内面口唇部近くに一部黒斑がある。

イ 円筒埴輪の口縁部（2・3）

2は格子目叩きの後にタテハケが施されている。格子のます目は正方形でなく、一辺3mmほどの菱形になっている。

口縁の下3.5cmの位置には横方向の細い直線がみえる（タテハケの後に引かれている）。あるいは、叩きのめやすとしたのかも知れない。

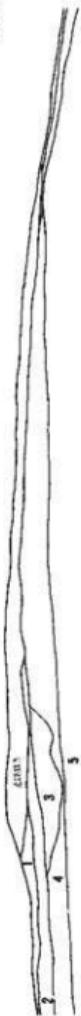
口唇部は軽くなられており、内面は横方向のナデと、当て具の痕のようなわずかな凹面が残る。また、内面は外面と異なり、全面が黒褐色である。器厚は7～8mmである。

3は下部に格子目叩きがわずかに観察できる。ナデによるものか、格子目の大きさははっきりしない。口唇部は平らになされており、内面には当て具の痕のようなわずかな凹面が残る。内面は口縁部付近を除き黒褐色である。器厚は7～8mmである。

ウ 円筒埴輪の副部（4～22）

4は出土した中で最大の破片である。タテハケの後に、格子目叩きが施されている。格子目は一辺3mmほどの菱形となっている。

584.06m

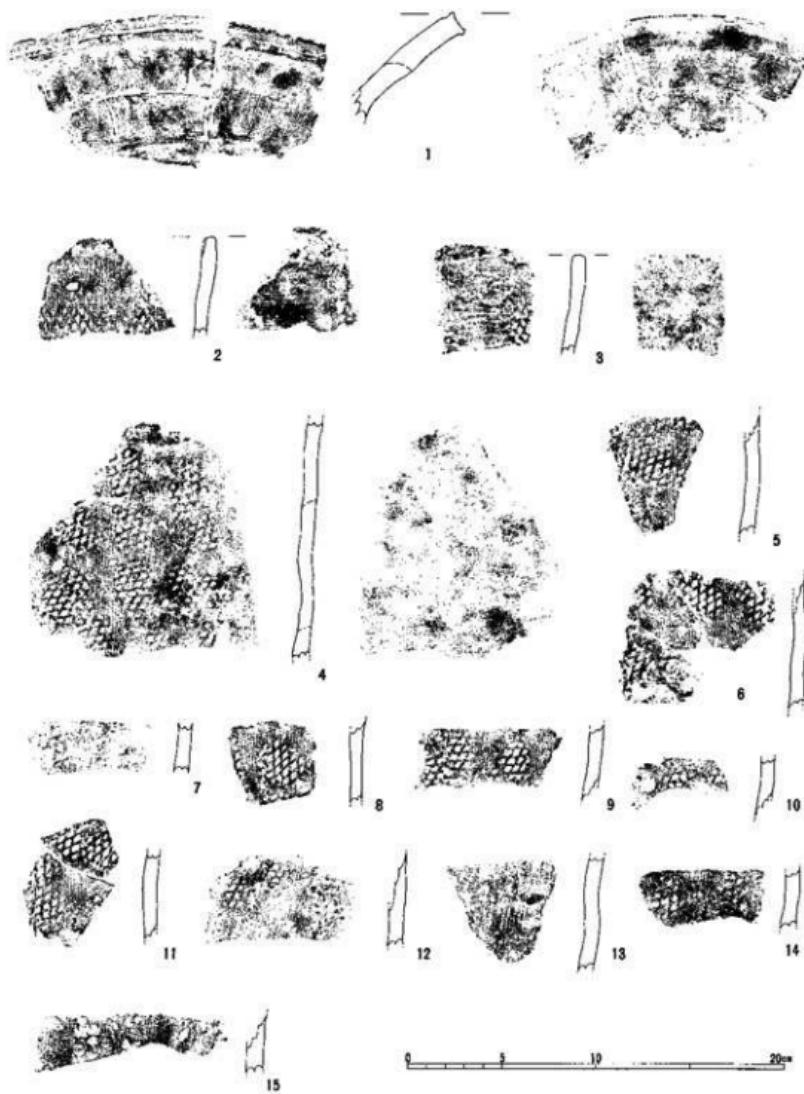


- 1 表土・耕土
- 2 茶褐色土
- 3 茶褐色土混じり黄褐色土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 硫酸じり赤褐色粘質土

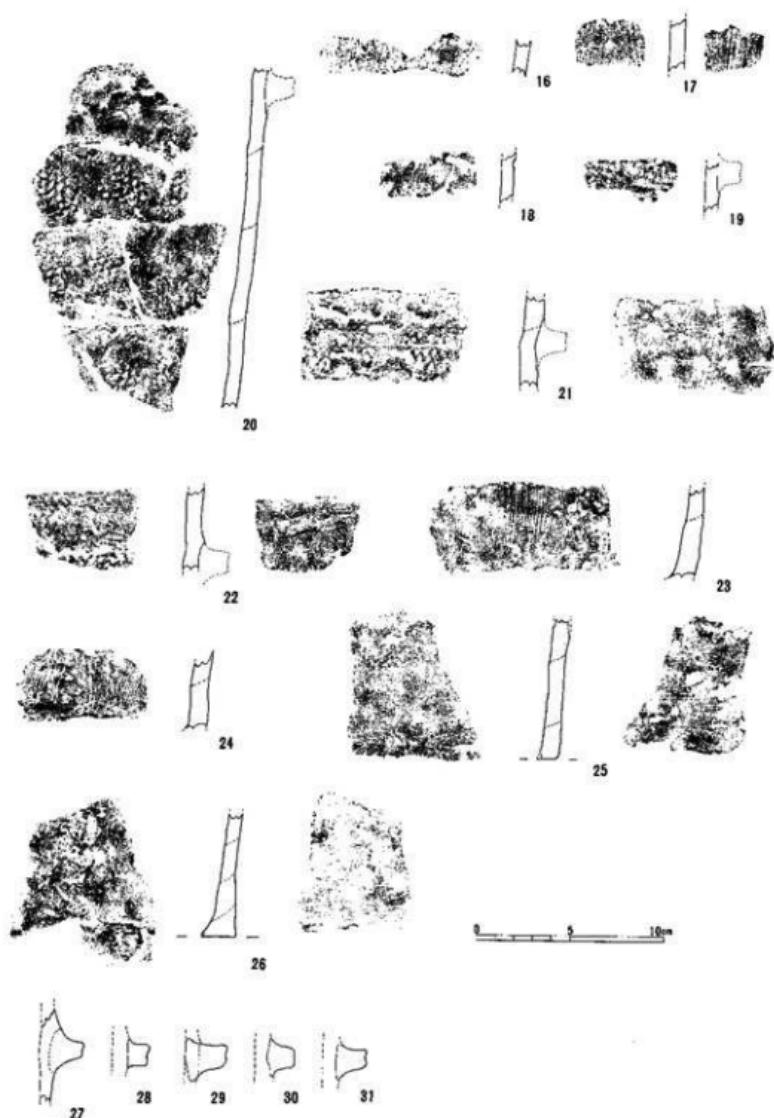
第10図 戸山塚古墳西側のり面 南北方向断面 (1 : 100)



第11図 戸山塚古墳西側のり面 東西方向断面 (1 : 100)



第12圖 壶申塚古墳北裾部出土埴輪拓影 (1 : 3)



第13圖 壶中塚古墳北裾部出土埴輪拓影 (1 : 3)

格子目叩きは全面に施されたのではなく、間隔をおいて施されたようである。文様的なものを意図したものかも知れない。

内面には格子目叩きの位置と対応するように当て具の痕のような凹面が残る。

内面は黒褐色で、横方向のナデもみえる。胎土は、きめ細かであるが、2mmほどの石粒も含まれている。器厚は7~8mmである。

破片から推定すると、径は15~16cmと細みの埴輪である。

4のように、タテハケの後に、格子目叩きが施されているものに、5・6・8・11がある。他は格子目叩きの後に、タテハケが施されているようである。

格子目叩きの施される時間に前後はあるが、ともに格子目は一辺3mmほどの菱形である。

内面は横方向のナデを中心とするが、縦方向のナデも観察される(12・17・18)。また、横方向のナデと縦方向のナデがともに見られるものもある(5・20)。

内面には格子目叩きの位置と対応するように当て具の痕のような凹面が残る。

14・20の表面には黒斑状に変色した部分が見られる。

19~22は凸帯が付いた部分であるが剥離してしまっている。

19・21・22には凸帯の剥離した部分にも、はっきりと格子目叩きが施されているのがわかる。

格子目叩きといっしょに、タテハケが施されたこともあった(21)。また、格子目叩きの後に、凸帶付着の日印としたのか、浅い沈線がまわる例もある(21)。

20の凸帯の下部には少なくとも18cmほどの胴部が続くことがわかるが、全体の形はつかめない。20の内面上部は横方向のナデが、下部は一部縦のナデも見られる。また、表面にはわずかに赤彩が残る。

19~22の内面は、ともに横方向のナデと、当て具の痕のような凹面が残る。内面が黒褐色などの他の例と共通であるが、22のみは内外面ともに黄茶褐色で、硬く焼かれている。22はまた、胴部にヨコハケが施されるなど、他とは異なる様相がみえる。

エ 円筒埴輪の基底部 (23~26)

基底部はふくらみながら、内側に折れるように広がる(26)。しかし、さほど広がりの見られないものもある(25)。

基底部はタテハケを主として、格子目叩きは施されないことが多い。

24の最下部には横方向のナデがまわる。

25の表面はタテハケの後をなでているようで、タテハケが明瞭でない。また、破片上部表面にわずかな凸凹が残り、格子目叩きも施されていた可能性がある。

内面は、ともに横方向のナデが施されるが、当て具の痕のような凹面がはっきりしない。内面は黒褐色である。26の表面には黒斑状に変色した部分が見られる。23から推定するに、底径は15cmほどの細みの埴輪のようである。

器厚は26で1.8cmほど、25で1.2cmほどである。

オ 基底部の凸帯 (27~31)

凸部は細みであるが、突出度が高く、断面はほぼ方形である。

28・30・31には赤色塗彩が施されていたようである。

27・29は内外面ともに黄茶褐色で、硬く焼かれており、22とよく似ている。

カ 須恵器甕（第14図1～4）

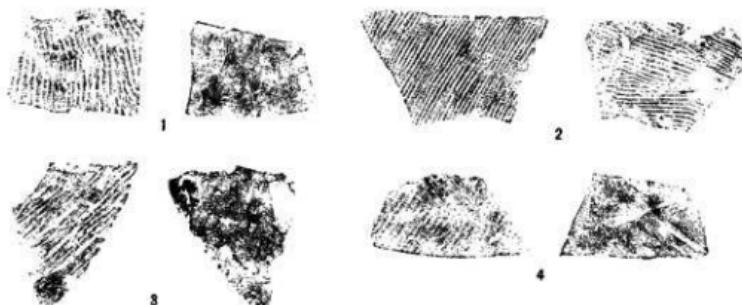
小さな破片が4点出土している。4点それぞれ別個体である。

1は頸部に近い胴部破片である。平行叩きが施される。内面は同心円状の叩きのあとをていねいにナデ消している。色調は青灰色である。

2は胴部破片である。平行叩きが施される。叩き板は、木目に対し70度近くの角度で溝が刻まれたようで、木目が浮き出している。内面も平行叩きが施されている。色調は青灰色である。

3は胴部破片である。平行叩きが施される。内面は同心円状の叩きのあとをていねいにナデ消している。堅織に焼き上がっているが赤褐色を呈している。

4は胴部破片である。平行叩きの後にナデが加えられたようである。内面は粗いナデが残る。色調は黄色味がかかっており、還元が不十分な生焼けの状態のようである。いずれも小片で年代の判断がしがたい。もっと時代の下るものかも知れない。



第14図 庚申塚古墳北側部出土遺物拓影（1：3）

3 平安時代の遺物

出土遺物 須恵器甕、灰釉長頸甕、灰釉碗、土師器甕、土師器甕、黒色土器高台甕が出土している。

須恵器甕は1点出土している。西浦遺跡SK2出土の須恵器甕と類似している。9世紀後半のものと思われる。

灰釉長頸甕は4点出土している。光ヶ丘段階のものである。

灰釉碗は2点出土している。小片で時期は特定できない。

土師器甕は20点近く出土している。いずれも小片で器形をつかめない。

土師器甕は30点近く出土している。いずれも小片で器形をつかめない。

黒色土器高台坏は6点出土している。いずれも小片で器形をつかめない。

分類できない土師器も10数点ある。

4 江戸時代の遺物（第15図）

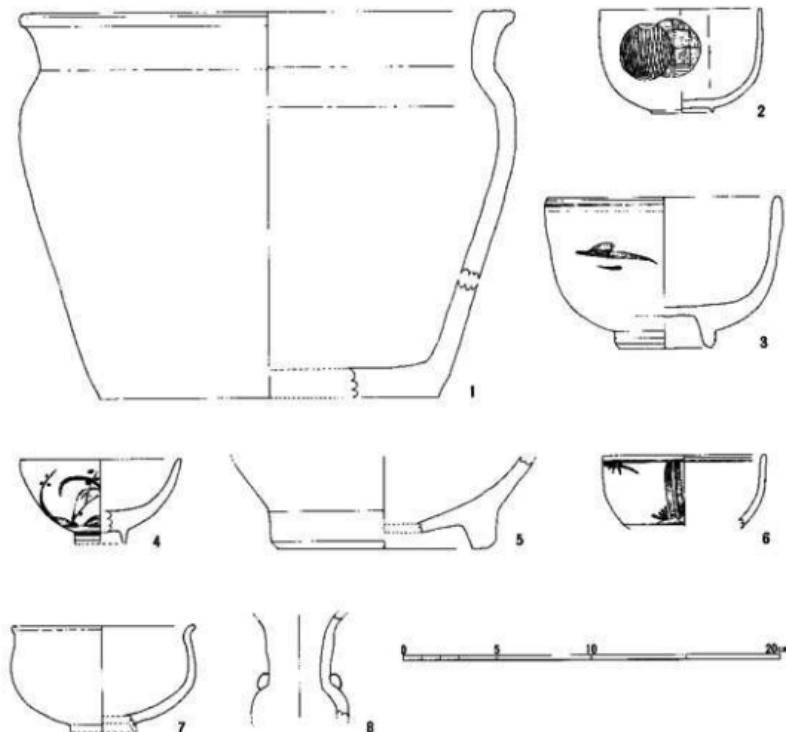
出土遺物 陶磁器、古銭（寛永通寶）、鉄釘が出土している。

陶磁器は、底地により唐津・伊万里系、瀬戸・美濃系に分けられる。

唐津系の陶器は6点出土しているが、すべて同一個体の鉢である。5は内外面に褐色の釉が見られる。削り出し高台で、高台部は無釉である。重量350g。

伊万里系磁器は染付碗、染付（碗）蓋、口錫皿、染付皿、そば猪口が出土している（図版18）。これらの合計重量は930gある。

染付碗 2は口径8.8cm、器高5.6cm、高台径3.3cmある。ほぼ光形である。内面底部近くは、つ



第15図 庚申塚古墳北裾部出土遺物実測図 (1 : 3)

ぶつぶと泡立ったような感じになっていて、見た目あまり上物ではないようだ。内面中央には菊花弁のような文様も施されている。18世紀後半のものと思われる。

3は外面白縁部下に2条、腰部に1条、高台部に2条の輪文が施され、外面には雲文（？）が施されている。高台脛付部分の袖は使用によって剥れている。口径12.3cm、器高8.1cm、高台径4.9cmある。18世紀代のものと思われる。

4は外面に梅花文が、高台部に2条の輪文が施される。口径8.6cm、器高4.6cm、高台径2.7cmほどの大きさになる。18世紀代のものと思われる。

瀬戸・美濃系の陶磁器は、鉄釉壺、染付碗、灰釉碗、灰釉花瓶が出土している（図版18）。いずれも小さな破片で、重量は全体で145.8にすぎない。

鉄釉壺 5点出土しているが、小破片で全体の器形がつかめない。

染付碗 6は口径8.7cm。19世紀前半のものと思われる。内面白縁部下に2条、外面面白縁部下と腰部に各1条、呉須で輪文が施される。外面には呉須で描かれた文様もみえる。

灰釉碗 7は底部から内湾しながらたちあがり、口縁部を大きく外反する。口径9.9cmある。高台部はごくわずか残るだけである。内外面に灰釉が施されているが、高台付近7mmほどから高台部にかけて無釉である。18世紀末頃のものと思われる。

灰釉花瓶 8は内外面に灰釉が施されている。肩部に丸みをおびた小さな耳が付く。18世紀末頃のものと思われる。

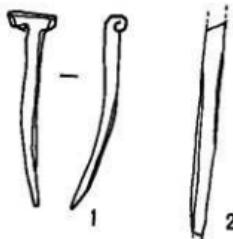
総じて18世紀後半では唐津・伊万里系の製品が、18世紀末以後は瀬戸・美濃系の製品を中心になる傾向を示しているように思われる〔1〕。

古銭は5点出土している（第17図1～3）。判別できるものはすべて寛永通寶である。

炭化層から3点の寛永通寶が、茶褐色土層からは1点の寛永通寶と鉄鏹に覆われ種別不明の古銭1点が出土している。

1・2は炭化層から出土した寛永通寶である。1は「永」の字の最後の払いが上にはねていると、「寶」の字の最後の画が内にはねているのが特徴的である〔2〕。

3は茶褐色土層から出土した寛永通寶である。裏面に「元」の字がみえる〔3〕。



第16図 庚申原古墳北側部出土鐵針（1：1）



第17図 庚申原古墳北側部出土古銭拓影（1：1）

鉄釘は3点出土している。いずれも、炭化層から出土した角釘である（第16図1・2）。

1は長さ3.4cmの角釘ではば完全な形をしている。基部上端を叩き延ばして折り曲げ、頭部としている。

2は現長3.8cmの角釘である。頭部を欠く。1より長い釘である。

5 その他の遺物

瀬戸・美濃系 近代（明治頃）の磁器が少量出土している。急須と型紙摺りの文様をもつ碗がある。

産地不明の陶磁器 壺、すり鉢、染付皿、急須などが出土している。¹⁾このうちすり鉢は5～6個体分の破片があるが、いずれも小破片で全体の器形をつかめない。

近代の色絵碗、色絵皿、染付碗も少量出土している。

第15図1は素焼きの壺である。同一個体の破片7点が出土している（620g）。

底部は糸切りのあとナデ。ロクロ調整痕が内外面に見られるが、内面下部にはナデのあともみられる。

胎土はきめ細かい。

註

1 直江津港に入荷した貨物の取り扱いについてふれた天明6年（1786）5月の大肝煎福永彦左衛門の書上げの中に「瀬戸物類信州へ八分、当郡式分」と記されている。また、寛政6年（1794）高田町奉行の許可によって、小町問屋が取扱いた商品に「唐津瀬戸物類」が含まれており【渡辺1962】。これらの陶磁器も直江津方面から搬入されたものと思われる。

渡辺慶一 1962 「江戸時代北国街道の交通」『信濃』14巻2号P24

なお、本文献は高野水篤氏に紹介いただいた。

2 似た特徴を示すものに出羽国秋田郡で元文三年（1738）より10年間に渡り鑄られた寛永通寶がある。

小川 浩 1983 『日本古貨幣変遷史』 P125 日本古錢研究会 同書でいう「大字」によく似る。

3 似た特徴を示すものに大阪で寛保元年（1741）より鑄られた寛永通寶がある。

小川 浩 1983 『日本古貨幣変遷史』 P122 同書でいう「接那宝」によく似る。

4 この、産地不明の陶器の中に、隣の三水村で焼かれた赤塙瓶が含まれていないかと考え、ご子孫の小林義治氏に見ていただいたが、該当するものはなかった。

赤塙瓶は瀬戸赤津の陶工が移住し、文久3年（1863）窯業を始めている。

なお、陶磁器については長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏にご教示いただいた点が多い。理解のたりないところは筆者の責任である。

6 成果と課題

（1）庚申塚古墳の規模

庚申塚古墳の埴丘実測図を初めて発表された松沢芳宏氏は「主軸はおよそ北45度東をとり、全長約45m、後円部径約25m、同高さ3.5m以上、前方部の幅約15～17m、前方部高さ1.5mを測る」と報告されている。また、後円径に対して前方部幅の比率が小さい点や立地から古い様相を

見いだされている。

今回の調査で、北側で検出した壠状の掘り込みの上端が583.37mほどに、南側で検出した壠状の掘り込みの上端が581.16mほどになることが明らかになった。これは水をたたえていたものではなく、丘陵を掘り込んで墳丘を形成したためのものと思われる。

善光寺平側を正面と意識したのか南側の掘り込みが深く、より後円部の高さを強調する結果になつたものと思われる。

北側の壠状の掘り込みを手がかりに、墳丘実測図（第6図・別添図1）を見ると、現状で、南（南東）側はほぼ標高584mをまわる線が古墳の外周となり、北側（北東）もかなり墳丘部が削平されているものの、やはりほぼ標高584mをまわる線を後円部の外周に想定できるのではないかと考える。

のことから、後円部の直径は約31m、また高さも墳頂部が588.70mであるので5m近くになるものと思われる。墳丘の全長も約52mになり、後円部西側には5mはある壠が掘られたことから、これも考えると善光寺平ではかなり規模の大きな前方後円墳ということになる。

また、前方部の形や規模については手がかりに乏しいが、葺石状の石列の曲がりが墳丘の形に沿っていたものと考えると、前方部はもっと開きそうである（幅20mほど？）。

石列の断面A-A'、B-B'でも、墳丘沿いは地山の黄褐色粘質土（いわゆるローム層）が道路敷き直下にみえており、かつて道路を広げた際、墳丘部が削平された可能性のあることも前方部がもっと開くであろうと考える理由である。

② 格子目叩きをもつ埴輪

これまで、格子目叩きの埴輪は長野県更埴市と長野市の境に位置する土口将軍塚古墳^[2]、埼玉県児玉郡児玉町の金鑽神社古墳^[3]と生野山将军塚古墳^[4]、埼玉県本庄市の公卿塚古墳^[5]、茨城県那珂郡東海村の權現山古墳^[6]の5例が確認されている^[7]。

これらの埴輪と庚申塚古墳出土の埴輪を比べてみよう。

① 庚申塚古墳出土の埴輪

出土した埴輪の量はわずかであるが、そのほとんどに格子目の叩きをもつのが特異である。

○ 格子目叩きをもつ埴輪の特徴

格子目叩きは一辺3mmほどである。格子目は正方形というより菱形に近い。この叩き目は、口縁部直下および底部付近を除いて全面に施されるようである。剥れた凸帯下に格子叩きの痕が残る例もある。

タテハケを施した後に格子目叩きを施す場合と、格子目叩きを施した後にタテハケが施される場合がある。後者の例が多いようである。

一定の間隔をおいて叩きを施すものが多く、装飾的なものを意図しているものかも知れない。

内面には、表面の滑らかなものを利用したと思われる当て具の痕がよく残る。

部分的に赤彩の焼められるものもある。

径が14~16cmほどと小型で細長い埴輪になるものと思われる（高さは不明であるが、剥離した凸帯の下部に、少なくとも18cm続いている破片がある）。

全体の段構成は不明で、透孔について観察できる破片もない。凸帯は細みであるが、突出度が高く、断面はほぼ方形である。

埴輪は土師質で、表面に黒斑状のものが残ることから、野焼きによって焼成されたものと思われる。

また、内面は黒褐色のものがほとんどで、表面との色調が著しく異なる[8]。

②土口将軍塚古墳出土の埴輪

人変多くの埴輪が出土しているおり、叩き目をもつ埴輪が主体をなしているのが特徴である。

外面調整は平行叩き後ナデ、格子目叩き後ナデ、ハケ、板状工具によるナデの4種がある（ハケ調整の埴輪と叩きは共伴しない）。

ほとんどの個体の外面には平行叩きと格子目叩きがみられるが、平行叩きと格子目叩きは共伴しない（平行叩きはナデによってほとんど消されている。格子目叩きの後のナデは、叩きを消そうとしたとは思えないほど軽いものである）。

格子目叩きをもつ埴輪の割合はさほど高くない[9]。

○格子目叩きをもつ埴輪の特徴

格子目は一边3mm前後の正方形である。全面に施されたようで底部付近にも痕が残る。剥れた凸帯下に格子目叩きの痕が残る例もある。

外面調整は格子目叩きの後にナデが加えられる。

内面調整は指ナデ、ナデ一部ハケの2例がある。内面に叩きを抑えるための当て具痕が認められず、接合痕も内外面が残るものが多い。

赤色塗彩の認められるものもある（長野市立博物館で実見）。

全体の形がわかる埴輪はないようだが、底部径は30cmほどあり通常の埴輪の形態をなしているようである。凸帯は二本あり、M字あるいは台形状をなす。

土師質で黒斑が残る。古墳の年代は、副葬品などからも5世紀前半に位置付けられている。

③金鑽神社古墳出土の埴輪

外面調整はタテハケ、格子目叩き、ナデ、板状工具ナデ、ヨコナデ、ナナメハケの6種類がある。格子目叩きをもつ埴輪の割合はさほど高いものではない[10]。

○格子目叩きをもつ埴輪の特徴

一边が3mmと4mm（正方形）の2種類がある。

外面調整は格子目叩きのみ（口縁部ヨコナデと共存するものあり）、格子目叩きの後一部ナデ消すもの、板状工具ナデと共存するものの3種があるようである。

内面調整はユビナデ、タテハケ、ナデ、ナナメハケ（口縁部ヨコナデ）の4種がある。

黒斑がみられる。古墳の年代は出土した石製模造品などから5世紀中葉でもやや古い時期に位

置付けられている。

ズン胴形をした器高54.6cm、底部直径40.2cmの埴輪が出土している。透穴は半円形で、凸帯は二本あり、突出は高い。格子目叩きは、口縁部（ヨコナデ）と凸帯部（ヨコナデ）を除き全面に施されている。

④公卿塚古墳出土の埴輪

外面調整はタテハケ、格子目叩き、ナデ、B種ヨコハケ、ナナメハケの5種類がある。格子目叩きをもつ埴輪の割合はさほど高いものではない^[11]。

○格子目叩きをもつ埴輪の特徴

一辺が3・4・5mmの3種類の格子（正方形）がある。

外面調整は、タテハケの後に格子目叩きをする例と格子目叩きの後にナデを加えるもの、格子目叩きのみの3種類がある。

内面調整はタテハケ、ナナメハケ、板状工具ナデの3種がある。

黒斑が認められる。古墳の年代は出土した石製模造品などから5世紀中葉に位置付けられている。

⑤權現山古墳（權現山第五号墳）出土の埴輪

この埴輪は調査後火災によって消失してしまったという。報文には、

「此の埴輪は全長六五センチ、直径二三・五センチ、肉厚一・二センチの円筒形で口縁部より約八・五センチの処に厚さ一・二センチの帯状のつばを附し、更に口縁部より円筒上部三分の一附近にかけて一辺約三ミリの方形の刻印を一面に附している。」とある。

以上、これまで確認されている格子目叩きの埴輪の特徴についてふれてみたが、庚申塚古墳例と同様の形状、調整技法のものは見あたらない。近くの土口将軍塚古墳出土の格子目叩きの埴輪と比べても異なる点が多い。

庚申塚古墳の格子目叩きの埴輪がどんな系譜につながるものが不明な点が多いが、格子目叩きの埴輪が共通して5世紀前半（中葉）に位置付けられているのが興味深い。

庚申塚古墳は後円部の高さと前方部の高さの差が大きかったり、前方部の開きが小さかったりする形の特徴から比較的古く位置付けられてきたが^[12]、他の格子目叩きの埴輪をもつ古墳と同様に5世紀前半に位置付けておきたい。

須恵器にみられる格子目叩きは、TK73型式を主体とする初期須恵器の、ごく初期に限られるよう、森將軍塚古墳周辺における初期須恵器の出土状況や土口将軍塚古墳出土の格子目叩きの埴輪の観察などから、格子目叩きの埴輪と初期須恵器生産との関連を考える説がある^[13]。

また、格子目叩きの埴輪に須恵質の焼き（密窯焼成のもの）が存在しないことや内面に当て具の明瞭な使用痕がみられないことなどから、半島系工人の関与を考える説もある^[14]。

県内最古の窯址は長野市信更町松の山窯址で6世紀初頭に位置付けられている^[15]。

平出地区にも20基以上の窯址が確認されているほか^[16]、隣接する長野市や（留山窯址）や豊野町（山の神窯址）にも窯址が確認されている^[17]。

しかし、庚申塚古墳の周辺では古墳時代までさかのばる窯址は検出されていない。

これに対し、鐵治久保古墳の鋸造斧状鉄器や近接する吉古墳群中の合掌形石室をもつ古墳の存在^[18]など、この地域の有力者と朝鮮半島との何らかのつながりを感じさせるものがあるようと思われる。こうしたつながりは庚申塚古墳の格子目叩きの埴輪にまでさかのばるのではないかと思われるが、今後の研究課題である。

註

- 1 松沢芳宏 1979「長野県上水内郡牟礼村庚申塚古墳について」『信濃』31巻4号
松沢氏は、等高線マイナス3.5mラインを一応塚丘の範と考へられた。
- 2 山根洋子 1987「叩きの埴輪」「土口将軍塚古墳」長野市・更地市教育委員会
佐藤信之 1987「出土遺物 塩輪」「土口将軍塚古墳」長野市・更地市教育委員会
- 3 佐藤好司 1986「金銀神社古墳」「埼玉県古式古墳調査報告書」埼玉県史編さん室
- 4 乾 芳宏ほか 1974「埼玉県生野山将軍塚古墳採集地輪片」「考古学ジャーナル」97号
- 5 佐藤好司 1986「公御塚古墳」「埼玉県古式古墳調査報告書」埼玉県史編さん室
長瀬成康・田村誠・太田博之・佐藤好司 1992「児玉地域の古墳時代遺跡と発掘調査概要」「児玉都市における埋蔵文化財の成果と概要」「児玉都市文化財担当者会ほか
- 6 権現山第五号墳の報告は大森信英 1955「常陸国村松村古代遺跡」にあるが未見。
引用は、茂木英博 1985「常陸における古墳研究抄」P225 「常陸國風上記と考古学」雄山閣による。
- 7 山根洋子 1987「叩きの埴輪」「土口将軍塚古墳」長野市・更地市教育委員会
- 8 「埴輪を実見された太田博之氏からの牟礼村教育長山田邦彦氏あての私信に」スリップを施した可能性が考へられる」とある。
なお、同氏の私信から埴輪の観察について示唆を受けたところが少なくない。記して感謝申し上げたい。
- 9 訂文文献の埴輪観察表によると実測図で示された74例のうち格子目叩きの埴輪は2例である。このほか拓影49例の中に格子目叩きの埴輪が11点みえる。
- 10 訂文文献の埴輪観察表によると59例のうち格子目叩きの埴輪は9例である。
- 11 訂文文献（佐藤1986）の埴輪観察表によると74例のうち格子目叩きの埴輪は8例である。その後の調査でも格子目叩きをもつ埴輪が見つかっているが、報告書未見。
- 12 太田博之・佐藤好司 1991「本庄市遺跡群発掘調査報告書V」一公御塚古墳
- 13 矢島宏雄 1992「千曲川流域の前方後円墳」P33「前方後円墳集成」山川出版社
- 14 木下直 1985「更地市域の内遺跡出土の陶質土器について」P412『信濃』37巻4号
- 15 橋本博文 1987「関東地方の埴輪」「季刊考古学」第20号 P72 雄山閣
酒井清治 1989「日本各地の須恵器と陶質土器 関東・東北地域」P226
『陶質土器の国際交流』同氏には1987「東国の大韓半島系土器」の論稿もあるが、未見。
- 16 笹沢 浩・原田勝美 1974「長野県下出土の須恵器（上）」「信濃」26巻9号
- 17 笹沢 浩 1976「須恵器生産」P187・195ほか「上水内郡誌歴史編」上水内郡誌編集会
小柳義男 1992「平出上の山道跡の調査」「平出遺跡群発掘調査報告書」牟礼村教育委員会
- 18 訂文文献ほか
- 19 米山一政・下半秀夫 1967「長野県長野市若槻吉三分古墳調査概報」「信濃」19巻4号

参考文献

- 川西宏幸 1979「円筒埴輪統論」「考古学雑誌」62・2
- 桐原 鍵 1982「信濃のはにわ」「はにわの世界」長野市立博物館
- 松澤芳宏 1983「飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」「信濃」35巻3号
- 坂本和俊 1984「埼玉県の前期古墳」「古墳出現期の地域性」千曲川水系古代文化研究所ほか
- 坂本和俊 1984「埼玉県の前期古墳概観」「古墳出現期の地域性」
- 土屋 積 1984「長野県の出現期の古墳」「古墳出現期の地域性」
- 岩崎卓也 1988「古墳時代の信仰と葬制」「長野県史考古資料編全1巻(4)遺跡・遺物」
- 車崎正彦 1992「地輪の種類と編年B関連」「古墳時代の研究9 古墳III地輪」雄山閣
- 門國男 1973「複合型古墳の設計」「信濃」25巻4号
- 上田宏純 1978「前方後円墳の築造企画と型式学的研究」「考古学ジャーナル150
- 石部正志・田中英夫 1978「前方後円墳築造企画の基準と単位」「考古学ジャーナル150
- 宮川 徹・堀田啓一
- 土屋 積 1980「善光寺平における前方後円墳のプランについて」「信濃」32巻4号
- 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- 丸山口出夫 1982「鉄釘に関する問題」「長野県中央道理蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—」長野県教育委員会ほか
- 東 潤 1982「東アジアにおける鉄斧の系譜」「古文化論集」
- 松井和幸 1990「日本と朝鮮半島の鉄と鉄製品」「季刊考古学」第33号 雄山閣
- 新納 泉 1991「武器」「古墳時代の研究8 古墳II副葬品」雄山閣
- 奥野正男 1992「鉄の古代史2 古墳時代」白水社
- 九州陶磁文化館 1984「国内出土の肥前陶磁」
- 田口昭二 1985(再版)「美濃焼」ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1989「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社
- 田口昭二 1993「美濃窯の焼物」多治見の古窯第3号 多治見市教育委員会

図 版



平出地区航空写真

（写真提供：ジャステック）

図版2



庚申塚古墳航空写真

（写真提供：ジャスティック）



庚申塚古墳遠景（北西方より）



庚申塚古墳遠景（南西方より）



庚申塚古墳航空写真

（写真提供：ジャステック）

図版 4



庚申塚古墳航空写真

（写真提供：ジャステック）



庚申塚古墳調査風景



北西方よりみた葺石状の石列（くぎれ部～前方部）



西方よりみた葺石状の石列（くぎれ部付近）

図版 6



北西方よりみた葺石状の石列（くぎれ部～前方部）



西方よりみた葺石状の石列（全景）

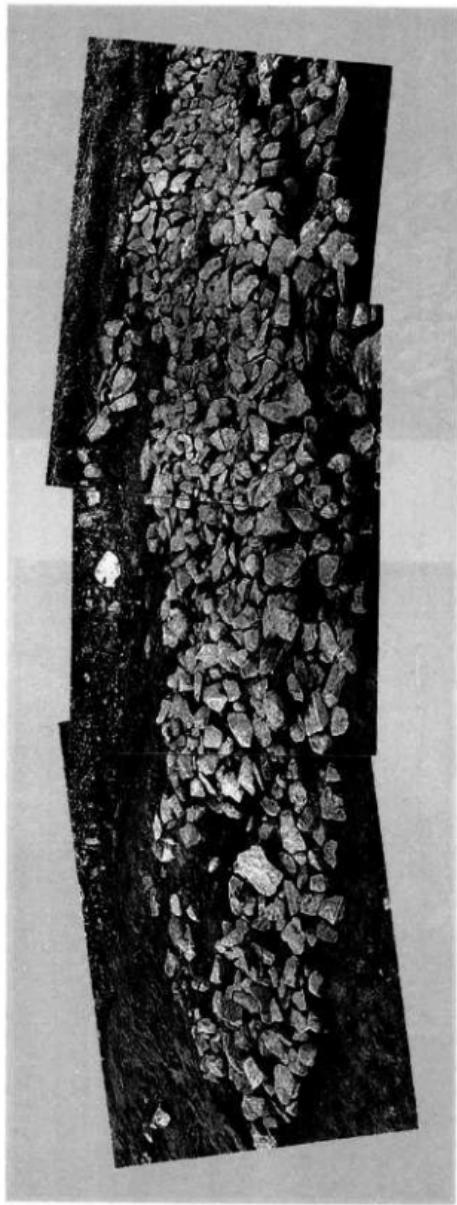


北東よりみた葺石状の石列（くびれ部付近）



北東よりみた葺石状の石列（全景）

図版 8



北方よりみた葺石状の石列



古墳部をめぐる石列か？

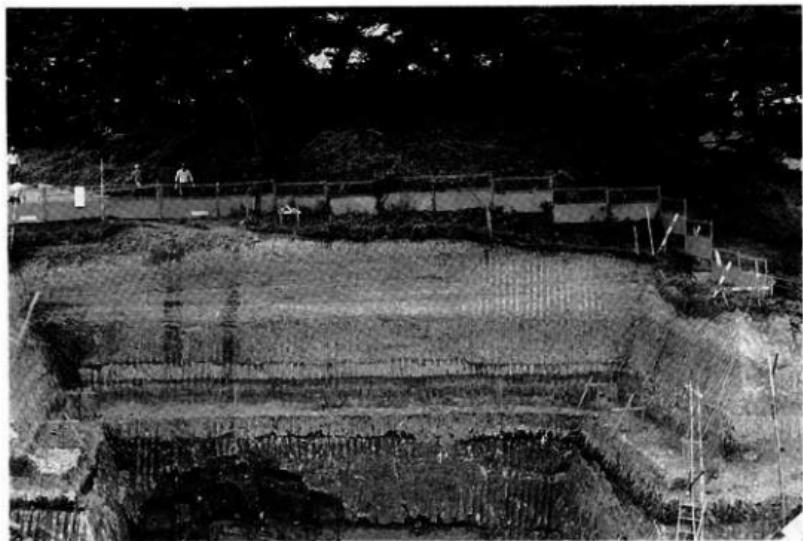
图版10



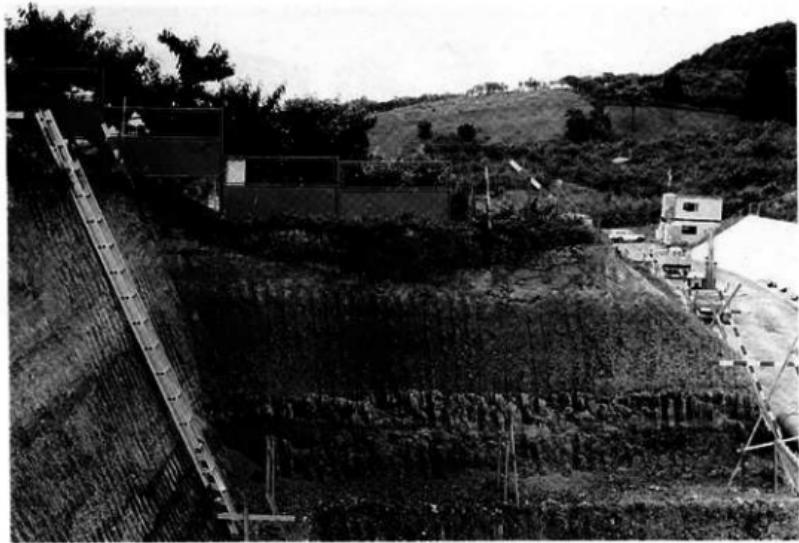
遗物出土状况



遗物出土状况



庚申塚古墳西後方掘削面（西よりのぞむ）

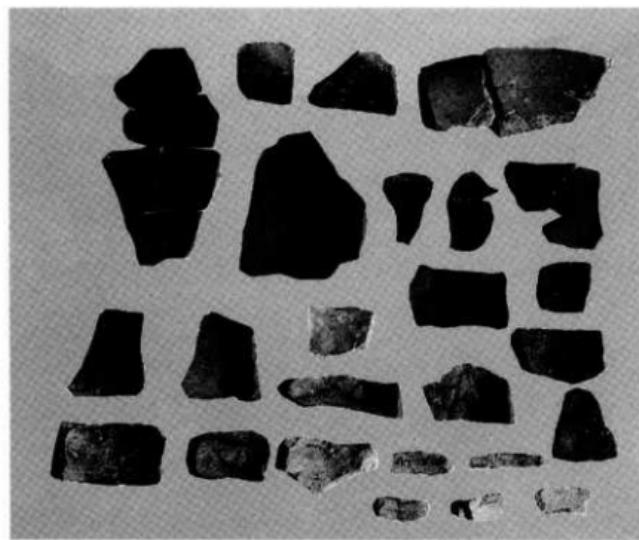


庚申塚古墳西後方掘削面（北よりのぞむ）

图版12

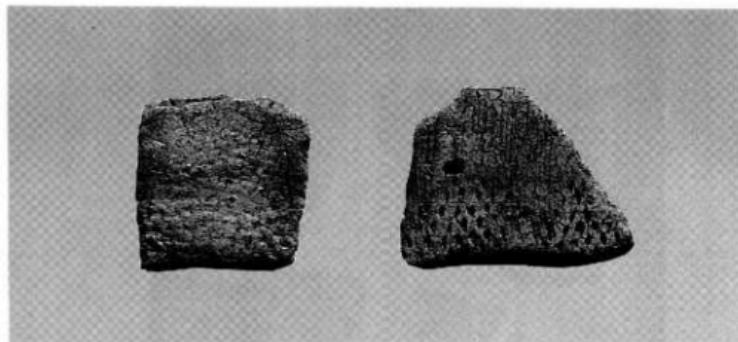


表
裏

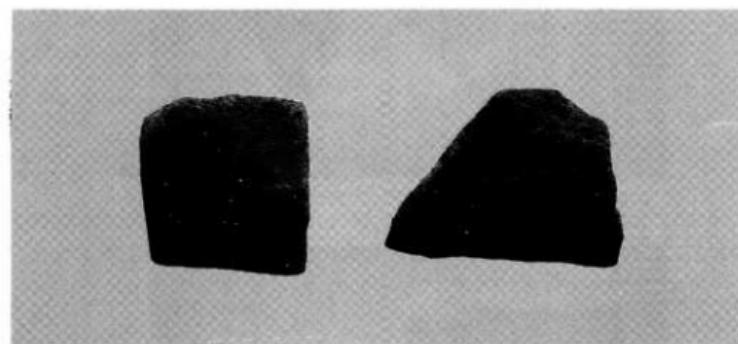


裏

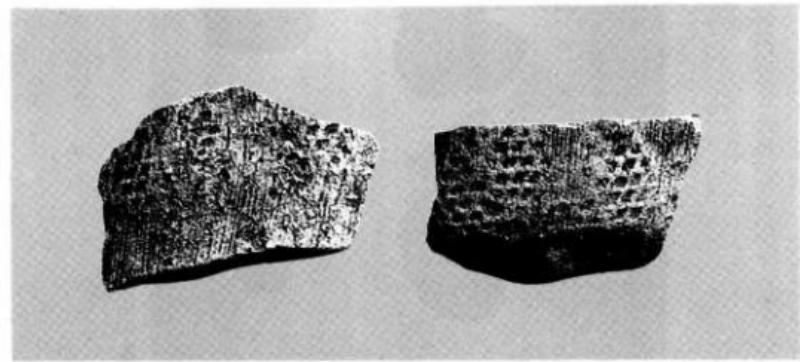
庚申塚古墳出土埴輪



表

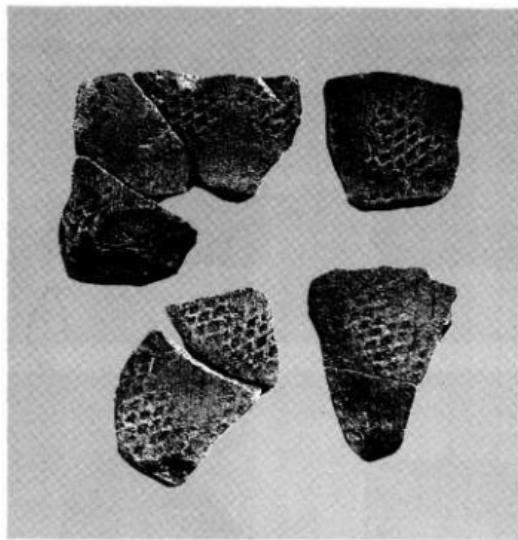


裏



格子目叩きの地輪

図版14



表



裏

格子目叩きの埴輪



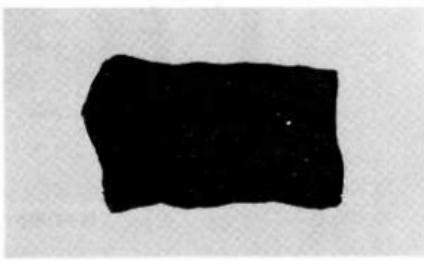
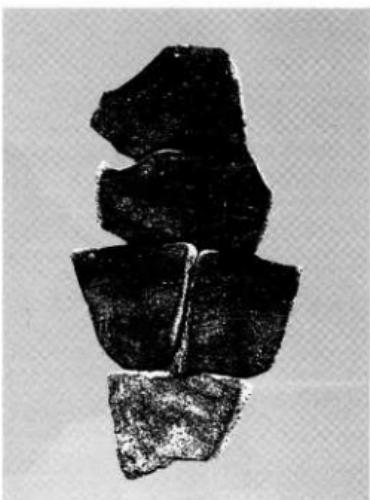
表



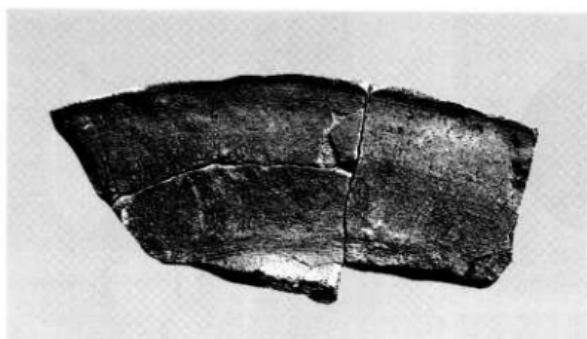
裏

格子目叩きの埴輪

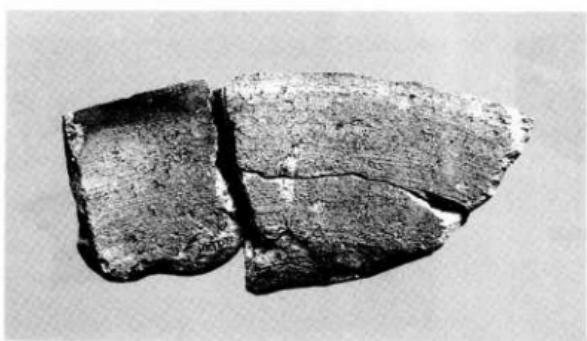
図版16



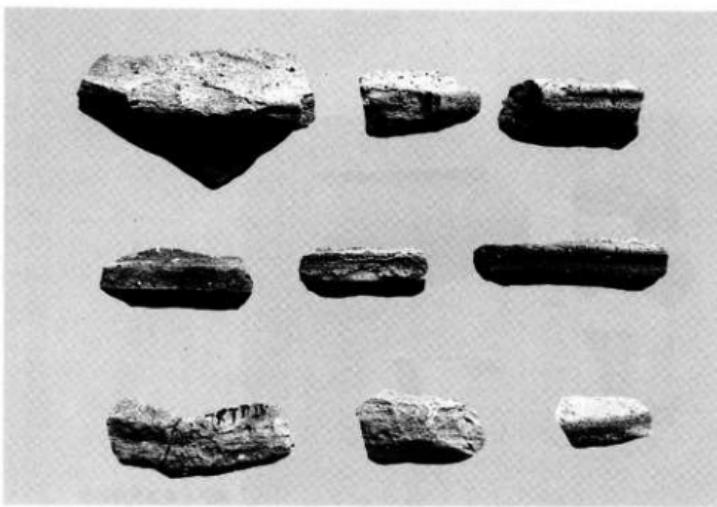
凸帯の剥離した埴輪



表

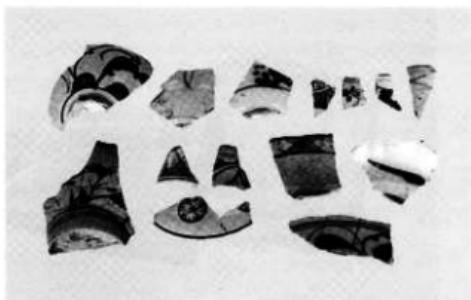
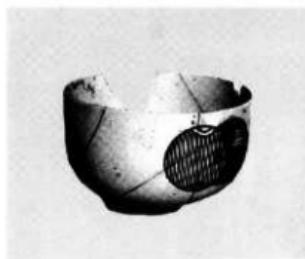
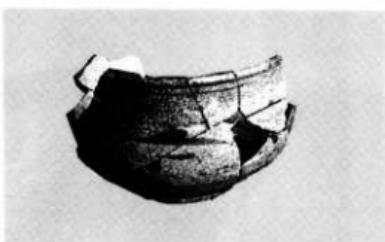
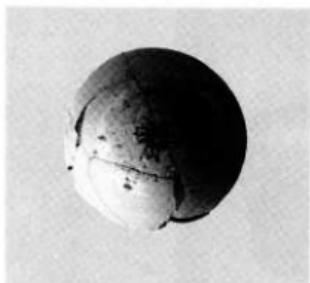


裏

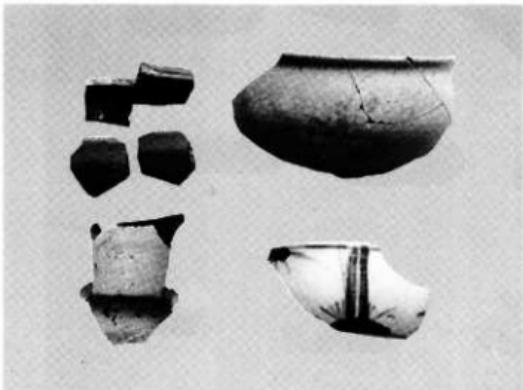


朝顔形埴輪と凸帯

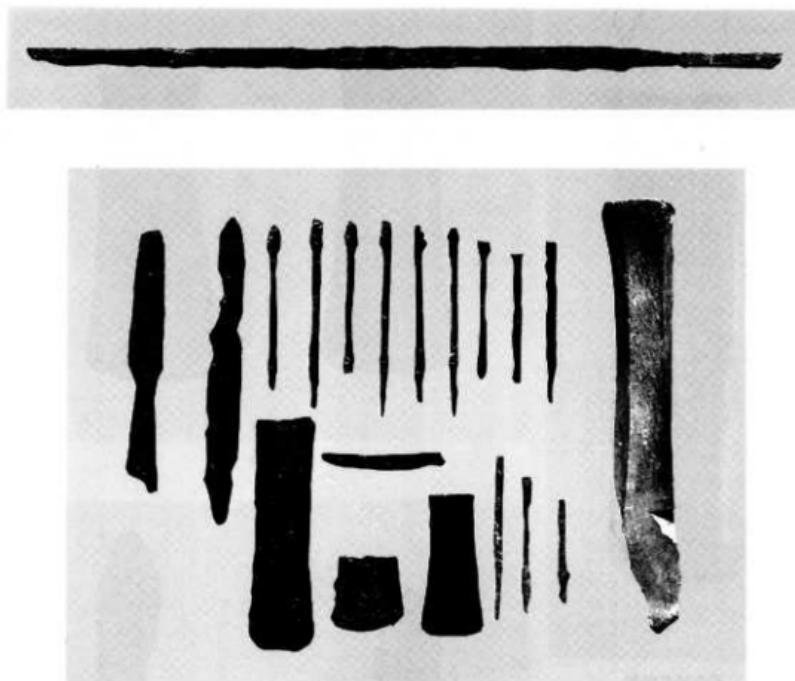
图版18



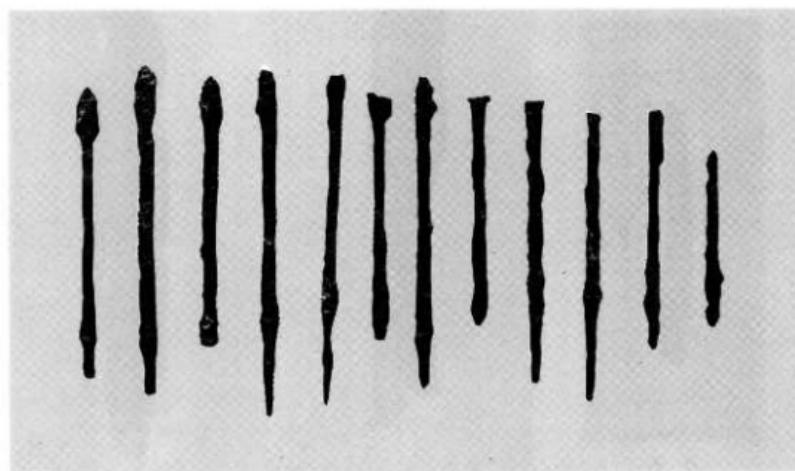
伊万里系陶磁器



瀬戸・美濃系陶磁器



銀治久保古墳出土遺物

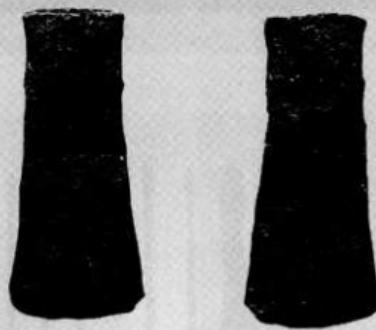


銀治久保古墳出土遺物（鉄針）

図版20



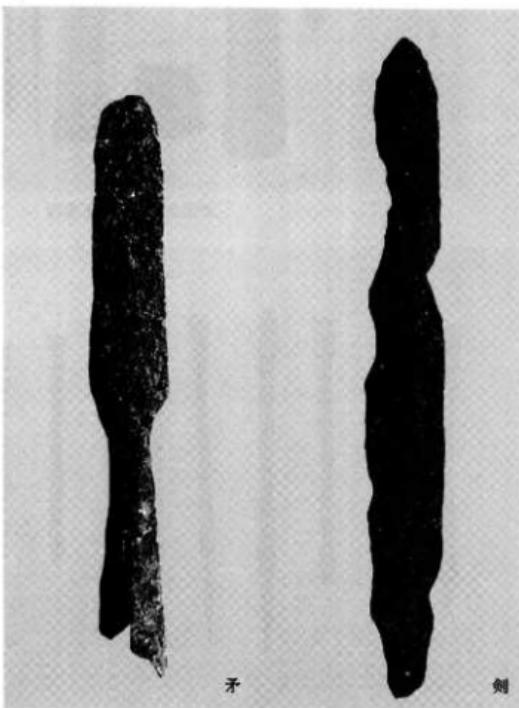
铸造矛状鉄器



鉄 矛



刀 子



矛

劍

銀治久保古墳出土遺物

おわりに

庚申塚古墳の調査をしたのは、平成5年（1993）の夏でした。雨でも降ると寒さを感じるくらいの冷夏でしたが、作業員の皆さんにがんばっていただき無事調査ができました。

道路敷きの下に、壙が検出できればと始めた調査でしたが、思いがけず葺石様の石が並びました。

どう対応していったらよいか、県文化課の百瀬指導主事や埋蔵文化財センターの小林秀夫氏に現地を見ていただき、村の建設課と協議し設計変更をして、できるだけ保存できるように考えました。

調査も終了まぎわに、またも思いがけず埴輪が出土し確認のため埋蔵文化財センターの土屋 積氏を訪ねて、それが格子目の叩きをもつ埴輪で県内2例目であることなどを教えていただきました。

知識も経験も乏しい私には荷の重い仕事でしたが、多くの方のご教示を得て何とか報告書を刊行することができました。ありがとうございました。

残した課題も多いと思います。ご批判、ご叱正をお願いいたします。
牟礼村教育委員会事務局の皆さんには、終始あたかくご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。 (小柳義男)

庚申塚古墳発掘調査報告書

— 村道改修工事に伴う前方後円墳の北裾部発掘調査 —

発行日 平成6年3月30日

編集 庚申塚古墳発掘調査団

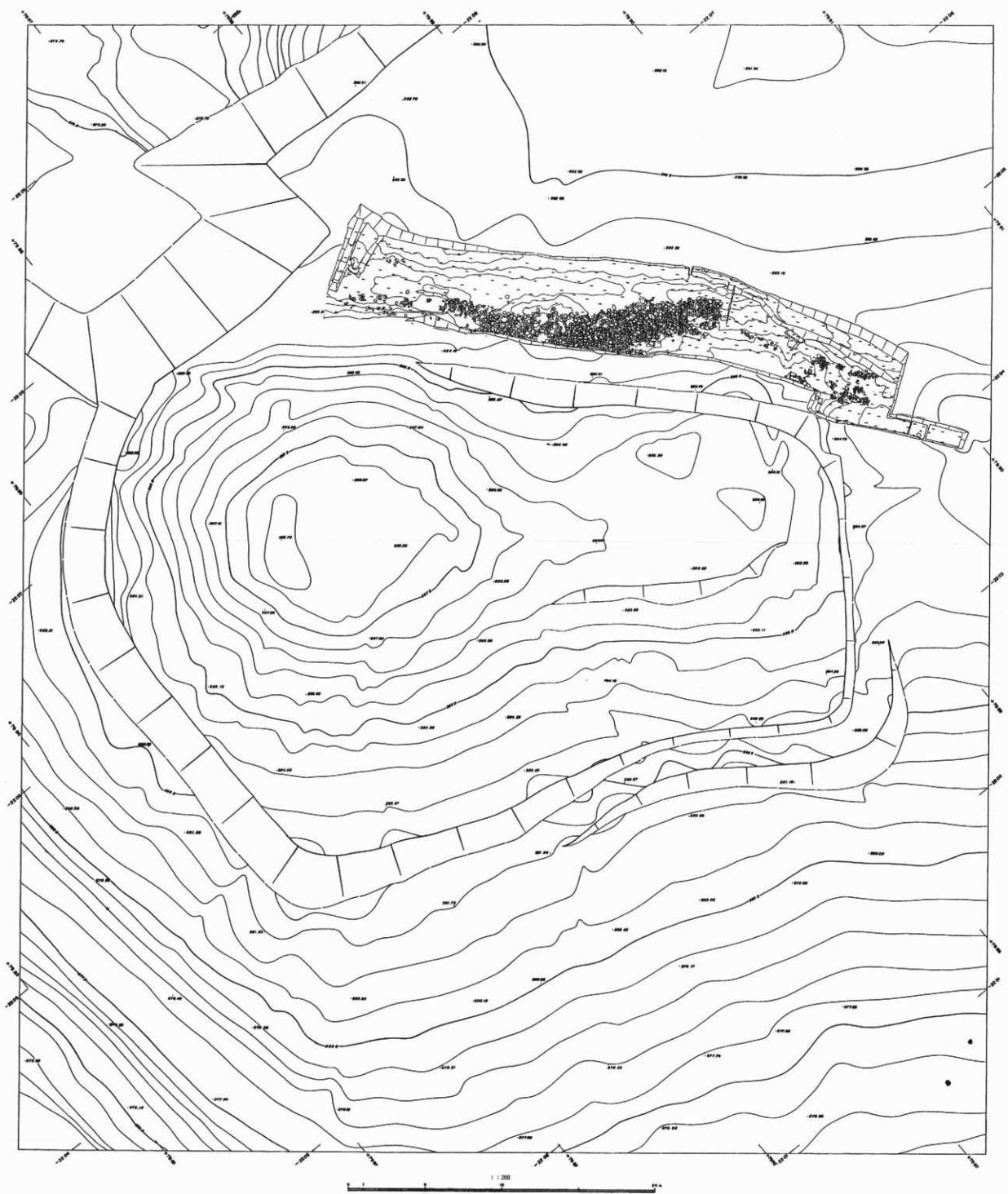
発行 牟礼村教育委員会

長野県上水内郡牟礼村大字牟礼2795-1

印刷 ほおづき書籍株式会社

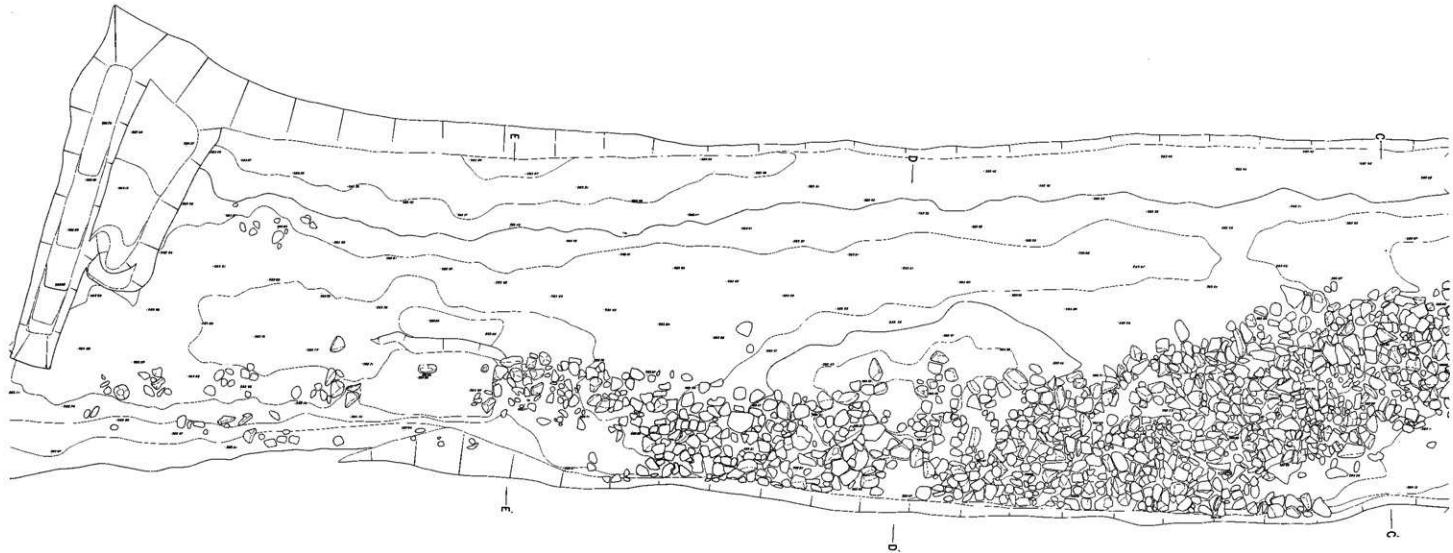
〒381 長野市柳原2133-5

別添図第1図 庚申塚古墳実測図（1：200）





別添図第2図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図1（1：60）



別添図第3図 庚申塚古墳北裾部の葺石状の石列実測図 2 (1 : 60)

